

主幹・麻生路郎

川柳新誌

五月號



大正十年三月三日創刊
昭和五年五月一日發行(每月一回一日發行)

川柳雜誌

第七卷第五號

川柳雜誌社發行

六厘坊忌

▼日時 五月三日(土曜)午後七時

▼場所 南區清水町電停西入北側

端の坊

▼兼座「舗道」三句

▼會費 三十錢

初心者の來會を大いに歓迎す

各地支部増設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を増設いたします。柳壇のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引き受け極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうさいふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

川柳雜誌 第七卷 第五號 目次

感想・評論

柳壇の人々 (一)

川柳の教育

竹馬居雜筆 (四)

迷へる人々へ

研究・其他

主觀句の研究 (二)

月卓を圍んで

BUILDING

KISHIEN, MANIA

断片三ツ

何處へ行く

街に住めば

親切週間

門外漢の見た川柳

放縱と咳嗽

將棋

若い心

さなり同志

一路集 (募集句)

水

保

本社四月例会

本社四月例会

各地柳壇

杭全町 MEMO

編輯後記

表紙 (金魚)

文字

川柳塔

近作

創作

石川

浅井

朝井

橋本

中見

阿部

熊本

櫻井

植田

松村

永田

西山

木村

長崎

佐々木

近作

橋本 綠

岩本 素

小出 重

麻生 路

出川 雨

伊藤 愚

高橋 琴

松本 素

岩本 素

伊藤 素

酒井 駒

安西 濁

中澤 多

松田 多

若井 多

須藤 多

谷村 多

丸山 多

上田 多

前田 五

富野 鞍

諸士 馬

家



近作

麻生路郎

夕櫻さんほがへりがしてみたり
氣違ひじみた夫をまもり老けてゐる
だらだらするなよ戀人も四捨五入
今會ふて來たさいふので信じてる
無産黨天を支へる氣でもゐる
歸れこは死ねさいふこにもあたり
人間はそんなものささ米を貸し
機械化のその群衆へ溶けこまう



貴任の重さが箸にまで重し
 花よりのも子の一足をみる夫
 出稼ぎの便り春からふみさぎ
 二階から相合傘へ聲をか
 唇の色を信じて別れし
 カクテルに通を言ふのも一
 だしぬけに濕布の友のろけ
 俺の金だに貯金せよ貯金せ
 鮎美氏結婚
 新婚の明日から貴夫な言は
 年頃だかから娘あわてる
 伸びてゐる伸びてくるその
 人間味の伸びてくる地下足
 プロカイキの二へ出来た足
 春の海不義の密柑の筋を
 断りもせすにも戀を知つて
 短靴の軽さも戀をきつて
 足数の何か嬉しき石疊
 無自覺を着飾つて嫁く娘な
 神に捧ぐる身の恵まれず候
 風船をふくる日傘のふさ持
 マネキンは繪日傘のふさ持
 ガソリン嬢笑つて助手の戀を聴く

同 同 京 同 同 大 同 同 神 同 同 同 同 同 大 同 同 金 同 同 松 同
 都 阪 戸 阪 澤 山

同 同 青 同 同 凡 同 同 九 同 同 露 同 同 鳴 同 同 銀 同 同 青 同
 砂
 兒 子 葉 斗 玉 子 帆



子の心親の心に店頭頭の春淺し
 百がて見よ見せられる日が遠すぎ
 や地の悪るさよ子供が起きた
 意生してやらう言へばみんな逃
 寫生するところへ霧がまいて來
 曲線をかいて走るも女なり
 若くありたし花に明け花に暮
 もの思ふ社長へ給仕お辭儀を
 土に石埋づめんこほして雪も
 スチム窓をさだけ淋しがよく
 人を叱ればそれだけや白粉が泣
 そんなにふざける朝晴有難や
 あか館を止めて出歩く春の宵
 圖書を止めた出雲のお札う
 相違ないすがたを雲の分けて
 籠の鳥ぬくさ寒さを知らし
 長雨に襦袢が椽を濡らして
 水鳥の水の死ぬ恰好な日な
 今日火守れど燃えてる横がう
 焚火のさしめ時は計は打つに
 窓をさしめ時は計は打つに

神 戸 同 島 根 同 同 同 大 阪 同 名 古 屋 同 金 澤 同 大 阪 同 同 松 山 同 同 道 後 同 同 神 戸

四

可 村 同 同 計 加 同 同 武 子 同 同 八 步 同 同 好 次 同 同 草 石 同 同 壽 女 同 同 明 果 同 同 巨 柿 同 同 鎌 月

枝



恩給へもう一年の長いものさ
 金持へ生れて来ればよいものを
 梅の香がわからなくなる梅の下
 チツプまで貰つて来
 月が出てよけいに寒くなられた
 算盤のそばで話してかられる
 水枕さても不便な土地に住み
 五圓握れば五圓の遊び知つて居る
 追憶の悲しくなりぬ寝てあれば
 國訛り商用文に見出しぬ
 來た際は寄れ書いたが此の暮し
 すき焼の時は夫に炊けさせ
 遅しき犬連れてる道廣し
 聞かぬ振りして妻に子を任せ
 何んさなく病入らしく居て易し
 踏ん張つて嬉しがる子を受け止める
 債券が一枚あつて氣がくさり
 借りがあるれば見捨てられぬ世なりけり
 古羅の自慢たらぬ母の春
 母さ居ておさな心の四十一
 雛子鳴けてお妙見山の谷のそこ
 雄辯に我黨ほめて水ばかり
 苦樂を共に五兄弟

大 同 大 同 大 同 大 同 大 同 大 同 大 同 大 同 大 同
 阪 府 鮮 京 戸 阪 池 阪 媛 阪

菊 同 空 同 一 同 さ 同 武 同 桂 同 志 同 山 同 如 同 晃 同 桃 同 幸
 路 山 柳 を 郎 枝 郎 門 空 卓 郎 太 泉
 だ



酒店を開く(二月十九日)

猪口をゆめるめて酒のよしあし
 左傾なきせぬが金持面が癩
 新らしいタオルへ朝日朗らかに
 日給を考へながら夕陽見る
 まじめならまじめで世間受け入れず
 臺灣をさうのここの無禮者
 追へば只鴉おさけた顔で居る
 型録に似ても似つかぬ花が咲
 自轉車に乗れぬだけども世に遅
 日向ほこ猫の抜け道見届る
 ストールプにまた水取の話が出
 忍従の淋しさを馬の目に見る日
 青い子だ小さい子だな餡をやる
 滋養ちさ過ぎ資本家の病ひ
 懐爐の火かへて集金やつこ去り
 明日旅行する兒を連れる女風呂
 忙がしい中へきらずを買ひに来る
 借りに来た兄の氣持ちになつても
 世界的不況だなきを儲けてる
 夢でよいから哀れを訴へる
 赤いものからこれには芝生の落椿
 仔馬へもちきれ無様な程荷が積まれ

大同愛同同同大 同 同 豊同大 同 鳥同松同鳥同堺同
 阪 知 阪 野 中 阪 取 山 取

無同青同清同與同柳同神同内同聽同大 同 源同金同
 鬼 笛 夫 兒 魔 守 松 樓 太 太
 夫 兒 魔 守 松 樓 夫 樓



吹き降りに出る吾家の親しくて
背縮びだけ口實の褪せした服
緊縮者が靴が磨けて晝にする
獨り好者に藝妓生れて來たらしく
昆布好きな花園(三句)
いつまでも處女を自慢のフリースジャー
ツギとしたグラジオラスの奥様だ
遠來の客に雨天の續くなり
一日を號外ばかり見て暮し
番傘の字をかくしたる今朝の雪
病みがちな母も出て來る日向ほこ
見込まれるまでの苦勞をしらすして
たまの休みを夫婦出そびれる
保護願ひ無事に歸つてキョトンミ居
あご紐の巡査立つてものを忘れ
暢氣さは知事や署長の名を忘れ
明日の式落葉を掃けば夜の嵐
ビラ配り腹の立つ程入れば行き
雨降り父はお經を讀むばかり
檢温祈りをあけて出してなる
友人の心安さに妻もなれ

同 同 同 登ヶ池 同 泉南 同 大阪 同 金澤 同 島根 同 大阪 同 森小路 同 大石 同 鳥取 同

八

同 二三 夫 坊 友 黄 雨 子 一 舟 素 心 同 不 然 同 耕 民



病死切サが圏初擱片川泣も春貧子運さふい古看氣
人顔り丨つ外栗み附幅かめの乏福轉よこまび護
へを^人出ビスカにおたひて廣丈いをすよ人けうたぬ三
泣寫のせぬへちよつびり氷の破れたりひり
いに真死^(二句)俺を謹嚴家言ふか
かさるのさらぬ氣のさ
国^の訛も聞いてくれ
さへかかれてる
はらしたに唄ふ聲さへかかれてる
あつた三味も古びた壁に似
死うたぬぞモルヒネを弄
た人^の世沙魚は食ふ
指を^出して見せ

同同 同大 同京 同姫 同金 同堺 同島 同大 同不 同大 同同
九 阪 城 島 澤 根 阪 明 阪

同夕 同笑 同瓢 同二 同木 同幻 同濱 同憲 同明 同沐 同松
鐘 四 樓 竹 人 草 郎 坊 佳 天 露
二 偶



頼まれ来たに對手のひやくかさ
 引越した二階は汽車の見ゆる所
 無産者のためじや何のまつまり
 叱られたり歸る女工へ汽車の笛
 言譯のやうに手拭だけぬらし
 ついで居るうちが暇取るコップ酒
 糠袋お前は餘程果報者
 高いさこ高いさころへ登りたし
 親切には齒磨揚子貸して呉れ
 弟がにらん飲んで飲まずに寝よう
 一度でも愉快に酔ふて欲しい酒
 古里はよい腹の子動く心が曇る
 酔拂ひねばつた様にならる
 湯で聞いて来た此頃の無用心
 支那の皮うたゝ寝の肘を刺し
 切れ話金のすむ氣がうらめしい
 かからすかあぐ櫛の赤きもの
 若き日の事さも筆筒の赤きもの
 きて見ればうそばかりなる暮しむき
 あんな娘があんなこを思はされ
 返電へすわり直して夜になり
 手枷もるのに世をばはかなみ
 母も父もるのに世をばはかなみ

一〇
 同
 炭 素 同
 大 朝 島 大 福 同 姫 同 神 同 上 同 大 同 天 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 阪 鮮 根 阪 岡 島 戸 田 阪 王 寺 堺 松 山

卜 救 夢 愚 不 同 方 同 艶 同 萬 同 縫 同 裸 同 太 同 春 同 素 同 炭
 居 命 二 坊 忙 眠 笑 樹 子 人 路 峰 峰 車
 四



若 堀 癒 新 濡 一 候 親 當 虎 手 碁
 空 へ 今 年 も 見 え ぬ 梅 を か き
 病 床 吟
 洋 装 は 心 だ つ 目 深 に や せ て る
 不 用 心 だ つ 目 深 に や せ て る
 赤 い 頬 を ソ ッ ト 盗 ん で 逃 け た 風
 工 場 か ら 顔 を い び つ に し て 戻 り
 此 月 も 豫 算 の 狂 子 の 病 氣
 高 島 田 姉 へ す ま ない 今 宵 な り
 斷 髮 の 畫 の 姿 に 辻 で 會 ひ
 裏 長 屋 女 ば か り に な つ て る
 カ ロ リ ー の 足 ら ぬ お 顔 に 厚 く 塗 り
 若 旦 那 店 さ 話 が あ っ て 夜 長
 堀 り 返 す 土 に 慰 め ら れ て る
 癒 え て 來 て 女 に 心 惹 か れ る よ
 新 聞 屋 集 金 毎 に し か ら れ る
 濡 れ る の を 覺 悟 で 傘 を 辭 退 す
 一 つ 星 見 つ け た 頃 の 森 は な し
 候 補 者 よ 泣 け 甲 斐 は あ り ま す よ
 親 の 手 が 下 で 待 つ て る す べ り 臺
 當 選 の 御 禮 は 派 手 に 乘 廻 し
 虎 の 子 を 皆 ん な が 笑 っ て 程 つ じ み
 手 が 一 つ だ ら び 笑 っ て 春 の 窓
 碁 に は 勝 つ た が 借 金 を 思 っ て 出 した
 借 金 を 思 っ て 出 した 春 の 窓

大 阪 敵 大 阪 豊 中 大 阪 大 阪 堺 戸 神 戸 大 阪 尼 崎 武 庫 川 神 戸 同 登 々 池 同 同 同 大 阪 京 都 堺 口 河 内

風來坊改

よ し み 籬 樂 海 勝 喜 竹 桔 正 虛 四 重 可 重 柳 朝 樹 碧 與 清 蒼 柳
 洋 人 二 天 雪 梗 博 白 路 子 章 郎 翠 雨 光 水 雄 路 太 腰



カフエーの戀にコーヒのほろにがき
 お座敷に火鉢は京の客を待ち
 ビクニツクうまあふてゐるよい天氣
 吐られたる内だご友は平氣なり
 スタンブルを局員なぐるやうに押し
 明らかなれせめては喋る時なりさ
 首でもくゞらはうかこ笑つた
 交際の一度は高い白切符
 寒さうに荒れるを聞いて寢てしまいか
 自轉車で夕闇走るハモニカ
 引き合ひまでへんそれからは袖の下
 天井の節が女に見えあまた
 不器用な分け方櫛をもてあました
 犬がうろつてく夕焼の町
 來る筈の面會は來す熱が出る
 花咲けさ娘淋しく病んだる
 くんである水若旦那きたながり
 戀を知らすこし見ぬ間に美しく
 高價藥ですこしが養生次第です
 市會議員來刀の日

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

一三
 愛 京 和 釜 盤
 知 都 歌 ヶ 池
 花 一 秀 長
 念
 蝶 坊 洞 城

衣 明 狂 芳 半 欣 茂 九 春 山 樂 閑 春 仙 青 紫 黒 靜 山
 童 童 童 童 童 童 童 童 童 童 童 童 童 童 童 童 童 童
 子 治 花 水 平 二 介 品 魚 子 雨 軒 夫 掌 柿 電 子 香 花

柳壇の人々

【1】

麻生路郎

蛭子省二君

朝鮮の蛭子君から

「こんなに肥えてはゐないんですが」
と注意書きをした寫真が届いた。

なるほご蛭子君は、こんなに肥つてはゐないが、この寫真をつくりのふくよかさはある。見るからに君子さいふ感じがする。また實際に於て柳壇稀に見る君子である。所謂君子なる者は事にあつて多く熱を缺ぐの嫌ひがあるが、蛭子君にはそれが無い。君にはかなり根強い持續性の熱がある。君が短詩人であると同時に古句研究家の重鎮であり得る所以でも

ある。

○
柳誌への寄稿家で、全柳誌の最も多數に關係してゐる點では君の右に出る人は居ない。多年喘息のために苦しめられた時に醫師に執筆を封ぜられることさへあるのに、しかも數年に亘る續稿を寄せて倦むところを知らないのである。この點何人の追隨をも容さない。

○
その執筆するところのものは多く句に對する考證であり、感想であるが感想の多くが達意の美文であるに比して、考證の難澁滯滞の文であることは全く別人の

観がある。

これは博覽強記の君が、引用の多岐に亘るのこ、つこめて原文を拔萃して誤りなからんことを期するがために止むを得ざる弊であらうとは思ふが、その學究的態度から更に一步を出で、今少しく嚙みくだいて、發表されたならば現柳壇を裨益する點が一層深められはしないかと思つてゐる。

○
蛭子君がああ博識に於てなほ且つ非常に謙虛な心の持ち主であり、何事を論ずるにも公平無私であり、何人に對しても常に親切であることは全柳壇の誇である

云つても過言ではあるまい。

君は趣味として日課として柳友その他へ不絶の通信をする。その通信文中には必ず君の人格の總和とも云ふべき隣人愛の心が溢み出てゐる。光つてゐる。

蛭子君の近ごろの句風を示すため本誌の新年號及四月號の『粒々集』からの左數句を抜く。

みなれぬ犬もゐて落葉たく旗日
書齋中心の間ざりて妻はねそびれ
妻さならび元旦をまつ春のび
賣喰の夫婦今年も犬を飼ひ
橋の真中で春らしくなり
母の座布団をひきお佛飯を頂く
古句の研究家云はれる人々は殆

んど古句から遠ざかつてゐる。たまく作句をしても平素研究に没頭してゐる古句に災ひされて、自然その創作には古調を帯び、詩想も又古句に立脚してゐる觀が多い。これは研究に熱心のあまり陥る

弊であつて萬止むを得ないのであらうが、蛭子君はその點全く例外の人云つていゝ。君の句にはさうした古調もなければ詩想の立脚點からして異つてゐて、古句研究に煩はされた微臭い痕跡を何



君の謙盛な心や、環境に生きる小靜な眞面目に接觸することが出来る。
君は又大の愛犬家ださうで、君の句に犬を詠んだ句の多いのも故なきことではない。

處にも止めない。寧ろ俳味を帯びた心境作家である。その調子を檢するに、碧梧桐氏が始めて新傾向を稱へた頃の句調に一脈の類似點を持つてゐるやうに思ふ。僅に抜いた上記の句に於てすら、蛭子

君は目下は朝鮮の光州に住んでゐられるが、生國は金の鹹銚のある名古屋ださうで、本年四十四歳の男盛りだ。元々石井姓であるが、いさゝか擔いで蛭子姓を名乗つてゐるんださうである。君が川柳に指を染めたのは中學の二年頃ださうだが、明治三十九年早稻田時代に久良岐社に入つて柳壇の人となつたのである。後年久良岐氏主張を異にしたため、一三年前遂に久良岐社を去り、自主な研究に生きてゐる。

(寫眞は蛭子省二君。昭和四年十一月二日撮影)



川柳と教育

福田山雨樓

本年三月の天王寺師範學校第一部入學試験中國語の問題に「俳句三川柳の類似點を相違點を述べよ」と云ふのがあつた。第一部は高等小學校を卒業した者が受験するのであるが、高等小學校の讀本には俳句三川柳が共に一課として句を示されてゐるから既にその概念は植付けられてゐる筈である。素より受験者の頭にはほんのさゝやかな概念しか映つてゐないことだらうから、およそ如何なる答案が集まつたかは大體想像し得らるゝところであつたが、それでも一抹の好奇心も手傳つて可成り興味を以て眺めたのであつた。

四月九日の午後路郎氏と共に、同校の山本教諭（國語科擔任）にお目にかゝる

機會を得たので、戀人に逢ふやうな心を抱いてかけつけた。山本先生は圖書室の一隅で心よく引見して下さつた。先生のお話によるに、大體の答案は試験官として期待してゐる程度に近い答を書いてゐたさうであつて自分が若しや想像してゐたやうな、珍無類な的外れもなかつたさうである。つまり俳句三川柳は同じ七字形の短い句であるが、俳句は眞面目にすなほに自然又は、たまに人事の季節に關聯した有様を詠み、川柳は主として人事に關し滑稽、皮肉又は諷刺の心持ちを以て詠む點が異つてゐるに、云ふ程度の知識を書いたものなら先づいふことゝゐられたのださうで、それ以上俳句三川柳の約束沿革さか句風さかの知識を期待

流行語及特殊語の

解説を募る

スピード時代に次から次へ流行語が生れて来るのは元より當然であるが、さうかするこそそれ等の言葉を充分咀嚼し切らない内に又新しい言葉が出るさふふうに全く急テンポの時代色である。例へば最近次のやうな流行語がある。

「シャマる」

この言葉の由來を聞けば面白い。曰く「無産黨方面では最近シャマるさいふ言葉が流行る、意味は「天の邪鬼」さいふことで、流行の由來はかうだ。勞農黨から「合同協議會を開かう」といひ出すと社民黨は「いやこつちは大衆黨と一緒にやるんだ」とつむぎを曲げ、大衆黨が「勞農、社民、大衆三黨で議會對策共同委員會を作らう」といふと社民黨は「おれは修正案通り」とひねくれる。今度は勞農黨から「各黨一致して對鐘紡闘争委員會を設けやう」と提案するに、社民黨は「ちよつと待つてくれおれは後から入るから」といつた具合で、さかく社民黨の態度はアツサリしない。そこで「コーヒ

し注文するのは、する方が無理であらう
と思ふ、云ふお話しであつた。

なるほゞ小學校の課程としてはそんな
ものであらう、いはゞ俳句や川柳の存在
をわすかに知らしめるだけの知識にしか
過ぎないのだ。これ等の知識を以て、川
柳なら川柳に對し興味を呼び起さしめ得
るこが、他日川柳家が續々生れるであ
らうさかの期待をかけるこが、あまり
に事大的な囑望であるこをしみるゝ感
じないわけには行かなかつた。

云ふのは俳句や川柳のやうな短少な
しかもリズムを持つた詩的藝術は、只一
通り小學校教育による概念的智識だけでは
理解出来るものではない、否理解は或る
程度迄出来るかも知れぬが、到底體得し
味判し感受するこは出来るものではな
いと思ふ。さうしても自ら句作に、句の
鑑賞に進進してその表現が如何に生みの
苦しみこそしてよろこびをもつてゐるも
のであるかを、自覺してからでなければ
ほんごに俳句も川柳もわかるものではな
いこに氣付いたのである。

けれども小學校の讀本が、單に川柳の
存在を知らして呉れたこだけでも、川
柳にやがて關心を持ち、進んじは川柳の
創作に之精進してくれる若人の數を、す
こに、されだけ可能性を賦與するこ
か、又師範學校の先生がかうした短詩に
興味を持たるゝこが、それ等の望みを
一層効果的に導くか否かは多言を要せず
して明かなるこであらう。

只遺憾に思ふこは、川柳を教へる爲
めに教科書に採擇された句が、古川柳こ
しても極めてまづいものが多いのみなら
ず、狂句の一つ二つもがはさまつてゐ
るこで、たゞへ概念的な知識にしるゝ
こんな句を川柳の代表的なものであるこ
教へられるこは誠に遺憾千萬である。
これ等は實際の教授に當つて、誤解のな
いやうに教師の用意を希望して止まない
ものである。

路那氏は尙われ等の川柳に就て、約二
時間近くも山本先生と懇談を交へられた
自分は學校の門を辭するに當つて期待の
外れた感じを償つて餘りある收獲と有意
義を見出したこは感謝に堪へない。

を飲まう」こいへば「僕は紅茶だ」こい
ふやうな態度を評してシヤミるこいふの
ださうな。

それ等の言葉は單に時代を漁る興味や
日常のコンモンセンスとして川柳家の誰
もが知つておきたいと思ふばかりでなく
あこから其の時代の風潮、思想、趨勢等
を味はふ場合に尠なからず役立つもので
ある。

又流行語でなくとも、例へば「しもた
や、やみな、ナンセンス、トーカー」の
如く今日尙その生命を有する言葉で可成
り意味の取り難いもの、或ひは意味の深
い特殊語「外來語を含む」も尠くない。
これにも一般川柳家の關心を求めなけれ
ばならぬ。

就てはそれ等の言葉の由來、意味等を
平易に解説して誌上に紹介したいと思ふ
本社に於ては鋭意せんさくに努めるこ
川柳家諸兄に於て御氣付の向はざしく、
左記に依り事務所宛御寄稿をお願いした
い。

記

○言葉の意味、由來、用語例等に付て御
存じの向きは簡單明瞭に（ハガキに書け
る程度で）解説せられたら。

○言葉そのものしか知らない場合はそれ
だけお知らせ願つてもいいし、又用語例
がわかつてゐればそれをお知らせ願ひた
し。



月評

卓を圍んで

路 郎 紋 太

山 雨 樓 ひろし

琴 人 亂 耽

近作柳樽 路郎提出

絶對安靜だ天井よ落ちてく

長 城

山雨樓……鋭い句ですな。

路郎……斯うした強い意識が働いて居る間は、病氣は決して進行するものではない。私自身にも経験がある。四月號で湖舟君が刀根山病院内の「初心者迷ひ」と題して問題を投げて居るが、私達の求めるものは此の句の作者の態度である。其處に詩が生れるのだと思つて居る。

山雨樓……僕も此の句の様な境地を体験したもので、飛付く様に共鳴した。鋭い生き々とした感情が病室の情景の中に溢れて居る。併し斯うした体験のない者には、或は錯覚の様なものも感ぜられるかも知れないが、此の

句はそうした懸念を超越して、鋭く呼びかけて居ると思ふ。

ひろし……「絶對安靜だ」を強く云つた處に力強さが出て居る。

山雨樓……而も句のリズムは、先程路郎氏が述べられた様に、前途に光明を認めて居る強い息使ひが、其儘句の上に満ちて居る。

亂耽……僕は此の句は、作者が非常に自分の病身を自ら勞はつて居る事を、上の勸の「絶對安靜だ」と稍誇張した言葉の内には、はつきり出して居ると思ふ。同じ作者の他の二句からも川柳家であるさ云ふ點に、非常に心の餘裕を以つて、自ら闘病術を試みて居る様子がよく解る。

琴人……生死の境に立つて叫ばれた本當のもの、眞に人間の偽りのないもので、境地は事實に即して初めて力強く表はれるものだ

と、此の句に依つて知る事を得る。
紋太……「絶對安靜だ」を云ふ言葉は此の句に千鈞の重きをなして居る。斯うした境地に居られるを思ひやる時、此の句の力強さに打たれず居れない。絶對安靜だを云ふ境地に思ひやりを持ってない人には、もしかするさ神所事の様を感じるかも知れない、眞剣さである。

山雨樓提出

思ひ出の西陽はまるく麥の涯

沐 天

山雨樓……僕は先達つて久し振りに、歸國して丁度此の句の様な境地をしみじみと味はつたものである。事件的には餘り複雑さを示して居ないけれども、リズムの好調の中に深く情趣が籠められて居る様に思ふ。

紋太……思ひ出と云ふ纏まつた言葉が、此の句を、少しく甘つたるくして居ないでせうか。

ひろし……少しく甘く感傷めいて居ますね。山雨樓……其の點は下五の結びによつて餘韻深きものとして居るだらう。

琴人……上五の甘たるいさ云ふ處に、此の句が何さとも云へぬ情緒を覺えさせられるやうだ。

紋太……僕はこの場合「西陽は丸く」を先きを持つて来るのが至當な感じ方ではないかと思ふ。思ひ出なるものは其の後から生じる感情のやうに思ふ。

亂耽……山雨樓氏の云はれる好調が、却つて禍ひして此の句を甘つたるく感じさせるのかも知れない。併し情緒を詠つた川柳として、は下五で救はれて居ると思ふ。

ひろし……元來が短歌の様な境地であるために川柳としてこなす事が無理なのではないか

琴人……それも當つて居るネ。

山雨樓……先程紋太氏の云はれた感じ方について句主はおそらく丸い西陽を眺めて思ひ出が浮んだと云ふよりか、身既に故郷或はみ馴れた土地へ來て居るから山河草木悉くが思ひ出の種ならざるはない。偶廣々とした夢畑に平和な陽が傾きかけて居る處にたまらなく詩美を感じたものと、自分は思つて居る。

路郎……春愁と云ふ様な感じを受取る事が出來て其處に作者の詩情の豊かさを認める事が出来る。甘いと思ふ批評があつたが思ひ出の斯うした情緒が持つものは、其の甘さの飽和にあるやうに思ふ。短歌の境地を詠んだと云ふ説があつたが短歌畑には確かに斯う云ふ情景が可成詠まれて居る。其の點から云へば古い句だとも云へない事はない。けれど共三十一音字を以て表現する情景を、十七音字で表現し得るをすすれば、短歌に其の冗長さがあると思はれても仕方があるまい。其の點に川柳の叙法の至難さと巧みさがあると思はれ、短歌との比較に於ては、一步優れて居ると云へるだらう。けれど共川柳の斯うした情景を詠んだものが、單に短歌の要約であると思

ば短歌と川柳との相違が、僅かに音字數の長短の差に過ぎない事になる。夫れでは川柳として獨特の詩であると思ふ。矜持はなくなつて終ふ。其の點を私達は此の句について考へなければならぬまい。

ひろし提出

落書へ白墨のない子がしやが

正博

ひろし……作者は今年小學校を出た少年である。一見路上スケッチの様ではあるが、白墨を持つ事の出来ない貧しい、一人の子供に對する同情がよく出て居る。非常に思ひやりの深い内容のある句だと思ふ。

亂耽……其處迄考へる事は却つて、此の句を損ふものでないかと思ふ。只此の句は一つのシーンをはつきり浮ばせた丈の句ではないか。

ひろし……同じ作者の「喜びを話せば義母は黙つてゐる」と云ふ句から見て、作者は可成年間に似合はない苦勞をして居ると思ふ。其の點から見て前述の通り考へて見た。

琴人……此の句からは無慾な何等の邪心のないものを受入れたらぬと思ふ。つまり美しい純真といつたやうなもの。

山雨樓……表現に盡されないものがあるのでも、一つ心持がはつきり波み取り得ない處がある。云ふのは「白墨のない」と云ふのは白墨をすら求め得ない貧しさ、云ふものは思はせるよりか他の子供が、落書をして居

る處へ偶白墨を持つて居ない子供が傍觀して居ると思つた程度の受取り方を素直に味はふ事が出来る。又下五は子供の姿態を表はして居るに止まつて、其の子供の感情がさけ込まれたリズムをなして居ない。

ひろし……「子がしやがみ」で充分うらめしそに落書を眺め込んで居る姿が、僕には解るもの。子供も云ふものは他の子供が持つて居るものを欲しがつて直ぐにも家へだりに飛んで歸るものであるが、其れが白墨を買ひに走らずにしやがみ込んで眺めて居ると云ふ處から押し僕に貧しい子とさざりた。

路郎……貧しい云々は、何うもうけさり悪いやうに思ふ。此の句の表現からうけるシーンには山雨樓氏の解説に同感であるが、下五の「子がしやがみ」の姿態からうけ入れられるものが無いと云ふ説には同感し得ない。併しひろし君のうらめしさうに云々と云ふ説明は、少しく誇張とてうけとつた感じのやうに思はれる。私としては自分も落書がしたいと云ふ慾求を感じる程度の情景がうけられる、此はほんの少しの差でしか無いかも知れないが、附け加へて置きたい。

紋太……僕も略同感であります。此の句はすらすらと滯りなく云ひ下して下五の「しやがみ」で解決の出來る叙法である。餘り句の力が「しやがみ」に集り過ぎて居るので、其のしやがみに何か理由があるのでは無いかと思はされる。夫れで此句が無心の叙法であると思はれる。白墨もたぬ」をさする方が至當であると思ふ。

ひるし……そうすれば皆様の 意見通りではあるけれど「しやがみ」が意味をなさぬ。紋太……併しひるしさんの云はれる 想であればしやがみよりもつと有効な言葉があるらうと思ふ。

亂耽……「持たぬ」ではいけないと思ふ。白墨の無いと云ふ軽い技巧に生きて下五の「しやがみ」では其の子が比較的大人しい子である。云ふ事が窺へる軽いスケッチに過ぎないのではないか。

紋太……「白墨のない」と云ふ言葉は如何にもひるし氏のとられた様に淋しい。子を思はせるものがあるが「しやがみ」と云ふ事でよい表現さは云へない。僕だつたら「白墨のない子が一人」として其姿は想像にまかせたいと思ふ。

路郎……そうするささしく情景が變つて來はしないか、成程しやがみよりも淋しささ或る柔らかなさが出るけれど、其裏には又白墨を持つて居る子供が一人以上居る様に思へる。原句では他の子供は目に浮んで來ないやうに思はれる。持たぬと云ふ表現に改めたらさ云ふ意味が出たが、持たぬと云ふ文字は此の場合全体のリズムを硬化させはしないか。意味は徹底しても詩としてのリズムが、害はれると云ふ事は句の生命に 重要さを失ふ事であると思ふ。

ひるし……此の場合「ない子は」持ち得ない子と僕は思ふのである。

山雨樓……此の句の評と離れた事であるが叙法に於て未熟な投句のあつた場合、従來路

郎先生は夫れに筆を入れて句を生かす云ふ事をせられないと曾つて聞いた事があるが、斯うした初心者もかなりある事である。てにをばの一字を直してすら一段と引立つ場合もあるのだから、着想に於て棄て難い句はごし／＼補筆を願つて句を生かす事にして戴き度いと思ふ。古へ芭蕉が選句の場合にもそうした物語がある事を、碧梧桐氏が語つて居る事を耳にした事がある。

路郎……曾つて月評の時に補筆をするか否と云ふ問ひが出た時に、作者の意思を尊重してにをば或は多少の文字の補筆をする事は稀にはあるが、句意が多少でも變化する場合には潔きよく棄て、作者の 思想の再燃に俟つ様にして居る。と云ふ事は云つた事がある。さうすれば此の句が面白い句になる。變つた句になる、優れた句になる。と云ふ選者の意見から作者の意思を曲げて迄補筆する。と云ふ事は、其作者から参考のために求められる場合の外絶對にいけないと思ふ。従つて極端な補筆をしない事にして居る。

山雨樓……お言葉ではあります。曾つて僕は俳三昧へ投句して居た時分、碧梧桐氏は其悉くの句を添作して居られた事を記憶して居ます。而も或場合には自分の着想と異つた句に變つた事も無いではないが、其の多くは添作された事に依つて、一段と句が引きしまつて來た様に思はれて居たし、表現の如何に依つて詩と非詩の差別がつかぬ迷盲さから救ひ出された事もあつた。又或雑誌には初心者の部と云つた様な部門を分けて居る事も

ある事だし、初心者指導の立場から飽く迄御再考を願ひたいと思ふ。

路郎……碧梧桐氏の添作云々は如何う云ふ場合にされたものであるか私は知らないが、近作柳樓並に川柳塔に於ては、作者の個性を何處迄も尊重して行きたと云ふのが、私の極端な添作改作をしない原因である。もし改作して作者の意思の曲げられた句が、作者の名に依つて發表されるは好ましく無いと思ふ。曾つて川柳雜詩で初心者のために添作改作欄を設けて其投句者に依る句を添作した事があるが、其場合には原句をも掲げて添作改作は改作をなし、初心者の参考に資した事があるけれども、川柳塔の欄とを混同したくない。もしこれらの欄に於て私が自由に改入されるならば作者の名によつて私の句が混入される事になりはしないか。其の點を考慮に入れて貰ひたい。

川柳塔 亂耽提出

文鎮に押えられてる履歴書

線之助

ひるし……君は痛切に感じるだらう(亂耽君に)

山雨樓……文鎮までも行かぬのだらう。

亂耽……それもある。極く平凡な事をかく句に纏められた事は、今こんな境遇にある私をしていさゝか感慨を持たせられた。

ひるし……就職難時代の世相をよく穿つてある。

亂耽……押えられて居るもの、豈履歴書のみならんやである。

山雨樓……「押えられてる」と言ふのは大變面白い表現であるが、「履歷書」を切つてしまつた調子に瑕がある様に思ふ。それは五七五の定型に必ずしも嵌めなければならぬと言ふのではないが、句を味ふ上に於て著しく潤ひを殺いた感じがするのみならず一種の警句めいた散文さしかうけとれない感じを懐れるものである。

亂耽……この不定型律によつて作者のゆさりのない心が出て居るのではないか。

紋太……作者を離れて居る様な感じがする。丁度水面へ投じた石の様な表現だと思ふ。この句は履歷書を提出した側の立場から詠んだ句であらうが、しかしこの表現の仕方では文鏡に押えられた履歷書を巡る色々の人の立場が想像出来ると思ふ。それに依つて一應面白い句と思はせられるが、讀み返へす中に山雨樓氏と同じ様な事も言へる所があると思ふ。

琴人……職を求めて居る人の心理を判然と窺はれる句だ。

紋太……それは職かつて居るのでなしに「押えられてる」と言ふ言葉の感じから提出した人の心持が幾らか窺へるけれども……

路郎……この句は作者自身の履歷書が文鏡の机上に於て居るのではなく、例へば課長の机の上をふと眺めた時そこに澤山な履歷書が文鏡で押えられてあつた。それを見た作者がそれ等の履歷書の提出者に投げかけた皮肉な眼であらうと思ふ。「押えられてる」の表現はある複雑さを出して居て、確に面白いが

「履歷書」をまつた表現法は句を味ふ上に妙なからぬ缺點だと思ふ。しかし定型律にするために「履歷書よ」と「よ」の字をつけ加へて感傷的な句にするよりは、この場合この儘にして置いた方が句のもつ内容を適切に表はしてゐると思ふ。

山雨樓……それは同感であります。

琴人提出

妻の留守着てりやそうてもない着物

光路

琴人……ちよつと見るとさうでもない様な句で味ふと可なり内容を盛つてある。其處にだらりさ掛れてゐる妻の着物、赤さか紫さか艶つばい色彩を感じる。滑稽味もあるし、何が襟ぐつたい様な氣持にもなる。何とも言へぬ自分に實感のある句である。

ひろし……僕は妻が留守にそこへ脱ぎつぱかしたといた、疲れた不斷着てあればそんなに見へなかつたに云ふのでないかと思ふ。

山雨樓……僕もひろし氏のお説に同感であります。

琴人……あたしは着て居ればさうけばくしいさと思つて居なかつたが、脱ぎ捨ててある女の着物、それは裏や襟などに可なりけばくしい色彩を感じる。着古した着物がそこに脱ぎすてたものであつて、さう古くなつて居ないさ云ふ様な意味であれば、この句の價値が一割減りはしないかと思ふ。

ひろし……「さうでもない着物」にどうも難がある。しかしそれがこの句の山でもある。山雨樓……僕は着古しの着物を見て可なり感じの籠つた句だと思ふ。着物を着て居る姿はいかにも躍動したものが浮んで来て、着物そのものが生きつゝゐる、感じを抱く場合が女にはあると思ふ。偶々妻が他出時に脱ぎ捨てた着物がぞべり、掛つて居る時には、まさしく幻滅の悲哀を感じる場合がある。

琴人……「さうでもない着物」と言ふのは？

山雨樓……それはそんなに古びたみつともない着物でもないのにと云ふ意味だと思ふ。そして夫の淋しい様な心持を汲みとる事が出来ると思ふ。言ひ換へれば萬更でもない着物と云つた様な氣持もある。但し以上は僕の主観であつて句主の主観と違つて居るかも知れない。

路郎……この句の缺點は妻の年齢がはつきり出て居ない所にある。従つて二樓の解釋が生れて来たのだと思ふ。戀人の脱ぎ捨てたものには多く琴人君の説明の様な感じから率いては戀人に對する愛着の念が出て來るのであるが、若し若々しい妻君の留守に脱ぎ捨てられたものだとすればそれに似た感じがなひでもなかつた。しかしこの妻が既に世帯をみて居るとすれば、ひろし、山雨樓氏の説として解する方が適切であらうと思ふ。私自身も後者の説をとりたと思ふが、その點は句そのものに年齢が判然としてゐない、憾みがある事を附け加へておきたい。

乱耽……「着てりや」といふのは、夫自身か着る着物と云ふ意味にもとれる。その場合は妻の趣味と夫の趣味との間に生じた歪み詠んだ句になると言ふのも一つ見方ではないか。要するに「着てりや」と言ふ叙法に缺陷があるのではないかと思ふ。

路郎……それは又さう考へ過ぎだと思ふ。第一時間の點に於て、又さうした事を考へると言ふ事に於て、大した詩情を感じられない點に於て矢張りその着物は妻の着て居た着物、脱ぎ捨てた着物と解するのが、正鵠を得てゐると思ふ。

紋太……僕も最初は亂耽氏と同じ取り方をして居たが、さうしてそれが正しいと思つて居たが、「それでもない」と云ふ言葉がどうも句意を曖昧にするので、結局わからない句だと思つた。しかし諸氏のお説でよくわかりました。色々にとれる事は「それでもない」に原因するのであらうと思ふ。しかし句主は充分にその實感を握つてゐられる事が、句の底に流れてゐることを感じる。私がわからぬから言ふ様ではあるが、今少し表現に親切さを持つて欲しかつたと思ふ。

紋太提出

新妻の大丸鬚へ蚊が止まり

里十九

紋太……美しいものへ變なものをもつて来てそこに錯誤から来る面白さを持たず事は川柳の一つの手段であつて、それがいけない

場合の多い事は承知して居ながら、僕はそれの面白さを捨てられずに居る。この句もさうした句であるが、しかしさうしたものにもしつかりとした實際感に根ざして居る場合は捨るべきではないと思ふ。その意味でこの句に引きつけられるものを感じます。

ひろし……古い型のものではあるが、軽いユーモアに微笑されます。「新妻」が特に生きてゐる。

山雨樓……只今の紋太さんのお説は、大變味ひ深く拜聴しました。おそらく紋太さんのお言葉は川柳の將來と共に、不滅だらうと思はれるのみならず、確に川柳の一面觀をいつかりと握りしめた解釋であると思ふ。こゝう言つた句想は單に面白味と云ふものを主体とした點がある様であるが、一步退いて考へるならば、川柳の發生的原因と云つた様なものが根強く隠されて居る。言ひ換えれば生地の川柳を代表して居ると言へる様な句である。勿論かやうな境地ばかりを狙ふ事は考へものであるけれども所謂それが、實感に根ざして、生れたユーモアであるなれば、人を動かしもするだらうし、何等排斥すべき理由はないだらうと思ふ。強いて理論つけるならば虚無的な句想ともうけとれると思ふ。

路郎……大部に立派な意見も出たが、稍解釋まけの句だとも言へる。しかし實感から來た句だとすれば嬉しい句だ。ユーモア味の句だ

と言ふ事は出来る。まあ紋太氏の解釋で盡きてゐるだらうと思ふ。

山雨樓……僕が虚無的とも思つた事は曾て正宗白鳥氏が創られた小説の中に「泥人形」「田園風景と地方の人事葛藤が虚無的背景の中に如何にもしつくりとされて居た事を記憶して居る。當時白鳥氏の作風は虚無思想の典型的なものとされて居たが、この思想背景の是非は問題であつたにしても、藝術至上主義的な作風に賞讃の聲が盛んであつた。俳句の無中心と云ひ小説の虚無思想と言ひ確かに藝術の一端を握る背景であつて、川柳に於てもさうした句の表はれる事も亦偶然ではなからと思ふ。謂はゞ藝術の發生的理論に關聯してこの句が検討されてもいいかと思ふ。

粲人……紋太氏がこの句を提出されたと言ふ所に紋太氏の見識があると思ふ。この句を何等變なものな交へず直感して、お説を樹てられた態度に敬服させられ、且教へられる所が澤山にありました。

亂耽……この句も確かに川柳の一端を握つてゐる。しかし僕は同じ人間と交渉を持つ蚊をよんだ句でも紋太氏の句「蚊になつて聞なし鹽のふちへ來る」と言つた見方の句に多く心を惹かれるものである(卷二・野路筆記)



竹馬居雜筆

蛭子省 二一

(九) 古句釋は雜事業——(梅屋敷の續き)

あの附近(ふかひ)一帶(いた)に七草(しちそう)はよかつたであらうから、

秋(あき)の七草(しちそう)長命寺(ながいのてら)近所(きんじよ)なり 古句(こくご)

もあり、東都(とうと)歲事記(さいじ)に、『秋(あき)ノ七草(しちそう)、七月(しちがつ)中頃(なかごろ)ヨリ、寺島(てらじま)村(むら)白(しろ)花園(はなぢり)、江戸(えど)名所(などころ)曆(れき)に、『向島(むかしま)花屋敷(はなやしき)敷(敷)、秋(あき)草(くさ)ノ中(なか)ニモ七草(しちそう)ト唱(な)へテ愛(あい)翫(くわん)スルヲ、コノ園(えん)中(なか)ニハミナソロヘテ植(う)植(う)エコミタリ』

私も(わたし)秋(あき)にはよく杖(つゑ)を曳(ひ)いた。『萬葉(まんやふ)』に『萬葉(まんやふ)集(しゆ)第八(だいいち)に七種(しちしゆ)のうたがあつて、

秋(あき)の野(の)に咲(さ)きたる色(いろ)を指(さ)折(お)り
芽(かき)數(かず)ふれば七種(しちしゆ)の花(はな)
姫(ひめ)部(べ)志(し)、また藤(ふじ)袴(はかま)、朝(あ)貌(も)の花(はな)

に本(もと)づいたのであらう、園主(えんしゆ)菊(きく)場(ば)には、『秋(あき)野(の)七草(しちそう)考(こう)』、『春(はる)野(の)七草(しちそう)考(こう)』等の著(しよ)述(じゆ)さへある、『詩經(しきやう)一(いつ)の方は多(おほ)分(ぶん)、詩經(しきやう)召南(しやうなん)標(ひょう)有(あ)梅(ばい)に、標(ひょう)有(あ)梅(ばい) 其實(其實)七兮(しちしよ)、求(もと)我(わが)庶(しよ)士(し)、迨(た)其(その)吉(きち)兮(しよ)、に因(よ)て梅(ばい)を指(さ)示(し)したものを見(み)做(な)したのであつた。

詩佛(しぶつ)が春夏秋冬(しゆんとうふしゅう)花(はな)不(た)斷(だん)、東西南北(とうしゅうなんぺい)客(きやく)爭(せう)來(らい)の騷(さう)を作り、千蔭(せんいん)は御茶(ごちや)きこしめ梅(ばい)干(かん)もさむらふぞ、の行燈(ぎやうとう)を掛(か)ける、庭内(てい内)に藤原公(ふじわらひのみこと)を祭(まつ)り、梅樹(ばいじゆ)一本(いつぽん)づつ寄進(きしん)させて、三百六十餘(さんぱくろじゆ)樹(じゆ)白(しろ)花(はな)に魁(けい)して咲(さ)いた、抱(いだ)一上人(いつにん)が百花園(ひやくはなぢり)と名(な)けた所以(ゆゑ)である。

角田(かくた)川(がは)梅(ばい)のもさにて我(わが)死(し)なば

春(はる)さく花(はな)の、やしさもなれ

菊(きく)場(ば)の辭世(じせ)だ、古句(こくご)の年代(ねんたい)を失念(しつねん)したのは遺憾(いげん)であり、園(えん)は文化元(ぶんわげん)年に開(ひら)かれた、甲子(こうし)夜話(やわ)には菊(きく)場(ば)の狡策(せうさく)なる話(わ)がつて居(ゐ)る、

こゝ句(く)釋(しやく)を大體(たいたい)きめてしまつた後(のち)に、再度(さいど)梅(ばい)本(ほん)翁(おう)から來書(らいしよ)、翁(おう)が某誌(まがし)の依囑(いご)により有花園(うけん)の事蹟(じせき)を調(しら)べて居(ゐ)らるるうちに、詩經(しきやう)中(なか)の種々(しゆしゆ)の植物(じふつ)を園(えん)内(ない)に栽培(さいばい)した事實(じじつ)を發見(はつけん)されたこの事(こと)してみるに標(ひょう)有(あ)梅(ばい)は苦(くる)しまぎれの考(こう)へ過(あ)ぎこなつてしまふ愈(いよく)以(も)て古句(こくご)解(げ)は雜事業(ざいじぎやう)であるに痛思(いたし)する。

(十) 御質疑(ごしちぎ) (ウマの句)

石川縣(いしかわ)の某氏(まがた)から、私宛(わたくしあて)に古句(こくご)五つお尋ねになつた書面(しよめん)が、本誌(ほんし)社友(しゃゆう)の杏三兄(けいさん)から轉配(てんぱい)された、ウマ年の故(ゆゑ)を以(も)て、ウマ關係(うまけん)のもの、留意(れいぎ)研究(けんきゆ)する、は喜ばしい、卑見(ひけん)は兎角(うまがく)誤謬(ごびやう)も多いと思(おも)ふ、弘(ひろ)く御高示(ごたうし)を希(ねが)ひホンノ御参考(ごさんかう)までの一筆(いっぴつ)を。

(一) 別當は馬や狐で茶をわかし

柳亭記や用捨函にも、『神宮寺の類を總て別當と稱するは、誰も知る如く、その神を守りかしく事なり』とあつて、此の別なる言葉は、かなり各様の意味に用ひられて居るは、それらの古隨筆にも、明かである、別當は文字の如く、本職以外の職に當るの義であるは、王朝時代から用ひられたのでもわかり、近く宮家には總務役を、別當といつた、法隆寺四天王寺東寺等の總務格の僧官から轉じて、石清水祇園字佐等の諸社にも、設けられた。

「馬や狐」は、馬や狐を描いた繪馬の謂であらう、それをたいてお茶をわかす、詩的の作さと思はれない、私のように繪馬に興味をもつ者からは、心ない事と惜しさを覺ゆる、茶をわかす處に、句の興趣をおびきだしたのでもあらう。

(二) 初午は世帯の鍵の下けはじめ

初午の事は、東都歳時記才に詳しい、
一 世帯買つてきたよと初の午
で、色々の物を買つてくる、世帯の鍵と、面白く表現したのであらう、子供關係の句である、

(三) 吉次が荷おるせば馬は喫でみる

牛若吉次の關係、例へば謠の『熊坂』に「扱も三條の吉次信高さて、金を商なふ商人あつて、毎年數多の寶を集めて、馬荷をつくつて奥へ下る、あつぱれ之を取らばや、與力の人數は誰々ぞ」とある如く、吉次は金賣である

半分はあげてもよいと吉次いひ
花の咲く國で金商人も出る
金賣が御味方さは吉びやうぶ
吉次が通ふ道すがら金びやうぶ
そこで吉次のおろした荷物を馬が喫くので、其荷の内容を示す
歴史吟中では巧な部であらう

(四) 御傳馬で行けば矢鱈に腹を立

私自ら未だ満足な見が浮げぬ 一般には切つて放てば矢の様な猪牙に對し、お傳馬ではノロクくぬて、腹がたつ、といふ様に解されて居るらしい、それも一説であらうが、お傳馬と猪牙の競争なら傾向を探して比較したいと、念望するけれど見出さぬ、念のため他へ照會してみたら、やはり印なりと回答があらう、後日再記させて置く——(此句柳權二篇及拾遺二(一)新旅の部に載る)

(五) 長生をする足輕は馬に乗り

これも難句の一つで、足輕寺阪右衛門が、たつた一人生延びて主をとり、今度は馬に乗る武士となつたといふ事であるそうだが、私の説ではない——一般にこう定められて居る。

序に、兵庫縣の某氏から

安藝者天窓も三味も馬でくる

の天窓かわからぬ、三味は左馬?と、お問合じあつた、が三味は撥を指したものであらうとは、天窓からの關係で、天窓は馬爪(バツ)の桶さか笄さかの謂だからである。

佐藤信淵先生の經書要録卷十三動物下篇にも「又馬瓜は扁梳(クシ)及び櫛十(コウガヒ)搔頭(カンザシ)等に製するときは、其美なるこそ玳瑁にも劣らざる物なり」で、安藝者のア

タマは「馬でくる」即ち、バツで飾りたて居る（玳瑁でなく）
で茲で馬爪、朝鮮ベツカウ及玳瑁に一言して置きたい

朝鮮の女安物ばかりさし

これが朝鮮ベツカウを詠むたもの、バツよりは多少上等品なわけ

朝鮮をやきうちにするベツ甲屋

等々の古狂句はまたある、朝鮮では牛は大切にする慣習がある、私は水牛に就ては未だ朝鮮側の文献を調べてゐない、何れ機会もあるであらう、歴世女装考に

朝鮮べつかふといふは、朝鮮にて産する水牛の角の肉付の際は、よく朧て玳瑁のやうにみゆる故、是にて櫛笄を作り、眞甲に偽はすゆえに、朝鮮べつかうさいふなり、かゝる事を創製は安永の始なり、其後朝鮮の水牛渡りすくなくなり、價も高くありしゆえ、天明の頃より、和の常の牛の角を用ゆ、是も肉付のきは、朧ゆえなり職人はな地板と唱ふ、其後天明の中頃に至りて、馬の爪をもつかふ、是を職人ばづと唱ふ、馬爪の略言なり道に石なく平臍なる所につかふる、馬の爪は、殊に朧も照りもよく牛の角に勝る、
江戶練馬の馬の爪上とす是を内の肉さし、外は眞の腹甲を皮さして、笄などに作る事になりたるが、近年は細工上手になりて、笄など四角なる所のみつゝみしを、本末さも六方をつゝむゆえに、素人には眞偽わかちがたし、然れどおほかたは二年ほどにて照もつやもぬけて、馬爪の馬脚あらはる云々

是れでバツミコ水牛ベツコフ製の事はわかる、玳瑁（べつかふ）に就ては「キャリ」誌（九卷八號）に「朧瑁の話」がのせられ

てゐるから、再陳する要はないが

笄と櫛に兩手を出した母

「十兩さいへば當時…文化…での大金」云々説明がつけられてある。西鶴の織留にも「透通りの玳瑁の櫛を銀二十目にてあつらへ」ミ、我衣には「享保頃より鼈甲の上品五兩七兩さなる依之常體の女求むるに不及力…それゆへ寛保年中より細工人にト手出来て、水牛の色よきに鼈甲の黒斑を入れて、ト鼈甲のまがひに賣、是も始は二十目ほども致しける」さある、天和頃にベツカウの櫛が一匁五分であつたのが、八十年後の寛曆に七兩の高値になつた——歴世女装考に諸書の引證がある。

箕埃隨筆に、玳瑁は南方鬮國の海中にあり、其甲を紅毛人持渡りて、婦女の髪飾とす、其價至つて貴し、然るに此龜肥前島原邊より陸州、又は大隅垂水の海中に有り、纔に亘り一尺餘にして甲薄く、櫛笄には作り難し云々、朝鮮玳瑁なるものもあつたようである。

X

餘白に、本誌七十一號に「略語解へ」として

神儒佛ごたまぜにするからく見世

のガラツが一般使用語であるを記した、實例を採擷てたがら記す、俗耳鼓吹に

又半込改代町の路次に、からくおくべからずもおかし、がらくとは骨董也

川柳塔

□
□
□

○ 松丘町二

街路樹のあはれ縁でゐて呉れず
ふみ氣がつけば揉手してゐる
偽善めけごも貧しさを誇りゐる

同窓の友藤井勇美君よりその
處女著作を贈らる

曠脈 深しこの鶴嘴の鋭さよ

天籟氏へ捧ぐ

風光るあつきなさけに觸れしき

罷工團敗る

闘つて得しはたなぞこのだるさのみ



○ 出口雨町

春なれば子等にも春のなりをさせ
暇がありすぎでのプラトニック、ラヴ
煙突の掃除をするも生きる道
相互扶助だなんてあなたはお人良し
金あらうがなからうが戀し街の灯よ
この家も賣つて大阪へ出よから
慰さめてやりたく慰さめても欲しく
この上に右の頬まで向けられぬ
佛壇へ俺もまつられる一人か
青空を見てるミ遊んでるのが恥かしい
新聞を二つもミつて遊んでる
誤解をミきに逢ひに行くなり

きれのるがいやさにもそれも買つてやり
抱くにしてもやせた女はたよりなし
唇がびつたり合つて「口口口口」
兄さんはがみぐ言へ「氣が弱く
形式を笑つてゐるは未だ若し
モダンガール告別式に欠伸が出
金持のひざり息子が風邪をひき
視察する知事は説明きくばかり
鶏つぶす心得もある後妻くる
自棄酒は仲居の酌がまごろしく
禁酒したこさを仲居に笑はれる
旦那さんがさきに讀んでる主婦の友

○ 住田 亂 耽

湯の街道後へ (五句)

二等 船客 のつめたき 表情よ
船窓にグロテスクなる 夜の島
船の 笛街は 小さく 残されぬ
蒼白き 新妻も 居て 船は よき

子規の墓に詣で、

鳴雪の 話は 絶ゆるまじ 線香
徴兵署の 存在を 知りし 朝
五圓紙幣 親に 従ふ外は なし

遊んでゐてもつまらぬが親が居る
交通 巡查も 派手な 生き方
春の 街眼に つきあたり 突き當り
本棚ばかり ふえて 失職

○ 伊藤 愚 陀

彼女の 小指は 桜色だつたよ
薄情が 美しいのも 朝 歸り
今日も 女は 笑ひ 暮しぬ
彼女が 一等美 しい 極樂
煽てに 乗つて 手を 握つて
おもしろい所に 黒子のあつた 戀
涙 涙よ なぜに まろきか
逢ふ日も やはり バット なりけり
何はさて おき 春は 戀せん

亂耽 兄へ

脊 廣着て きて 小遣ひが 欲しいなり
手 枕に 何を かくさん 獨身者
この 戀も かくし おほせぬ 春さなる

○ 福田 山 雨 樓

さつかく 巡查の 眞晝
生活の つかれ 大工の 黒い影
兒がのびてゐる さつきの 若葉

家へ歸ればきつからか聲

源坊氏の結婚を祝す

親の眼にうつるすべてが明るすぎ

○ 高橋かほる

支那火鉢肩巾ひろく獨りゐる

ポケットへ兩手を入れて好い巡査

はきものゝかへ事をする下向道

春の海マツチをすれば消ゆるなり

わか竹で呑んで別れりや十一時

○ 石川双葉子

柳友蒼梧樓の榮轉

主義主張もつ獨身を見込むなり

轉動の人々

顔色を見て高飛車に出るもよし

保険屋だなと思はれる型になり

○ 松盛琴人

閑人の閑語へまろき膝頭

赤い灯もよし若い妓もよし春めける

疲れてるネエミ温かい言葉味ひぬ

信任も厚く脊廣がやけてるる

運勢をいふ女房まなつてきた

一人娘母を女中のやう使ひ

○ 淺井冷々子

子の事が目に付き世帯締つて來

やりこめる力待てく孤獨の身

ほろ儲け犯罪迄のきわに立ち

好い花のミこで筏へ渦を巻き

○ 岩本素人

刻刻サバルバルサンが減つてゆく

書を描いてやればしつぽく言ふて呉れ

涸れてゐる聲を忘れて管を巻き

七十になつても母は京育ち

冗談の様に買収話しかけ

口癖のコントロールへ又胎み

一等バスで居眠りにゆく

山羊やつた日の夕飯の灯の暗さ

日曜日ミこかで釘の音がする

ンレトゲン

恥しや俺の臟腑が見えるこや

○ 朝田新水

愛人にやがて見せんミ種を蒔き

はゞからぬ戀銅像の前にくる

寝たりないまゝに釣瓶を軋らせて

貧しくも春の娘に出来上り
昨日今日暮れておかしやサポタージュ
復縁を迫るに二階借つてあり
別れても煙草位はくれるなり
純情の戀にも泣いた酌婦なる
今はもう高歩きころか娘まで

○ 伊藤緑之助

ある友へ

煉炭が何うのこの世帯じみ
荷車を出しかねてゐる花ぐもり
母が切る佛の花よ露しきッ
おもへば刃の中のからだなる
死んだY女を懷ふ

墓に立てば明眸限りなくなし

○ 水谷 鮎美

君さ僕歩速の違ふことを言ひ
めだかの戀は流れくつて
傘させば雫はあをし春の雨
善人の笑へばひこりほつさかれ
まがりたる鼻のあるじはブルシヨアよ
プロレタリヤ首をふるのに雇はれる

ハイジャンプしきりに春の女の子

○ 酒井 駒人

射的さへすれば煙草になる男
奉公に行く迄桃割で助る
同郷の仲居が見せる指の疵
チンドン屋家へ歸れば老いた母
色街で仲居に逢へば洗髪
新參の女給に地味な柄の夜

○ 橋本 緑雨

明日のこころはさうなるものか
自轉車さ別れ自轉車もう見へぬ
よその事はきくばかりにしてるます
たゝみかけた羽織に電話掛かつて來
桃も散りぬ櫻も散りぬ坐食の身
資本家さたゝかふによし春の日よ
やこひ手がない原始時代の來たらんか

◇ 中見 光路

タクシーで足踏張つて見て淋し
一日の疲れズボンの鈍角度
慰めの心か若葉揺れて呉れ
草餅を持つて來た乳母汗をふき

青空へ欠伸抛けたるかゝり人

◇ 安西 杏三

目を盗み時間を盗み今日も暮れ
下役がきて鶏小屋も出来上り
ランドセル親の地位なぞ考へず
お互ひの夢を護つて呑むコーヒ
臺なしにされた夫へ手をつかへ

◇ 阿部 閑生

法の座へ相場のラジオ聞こえず
踊り妓の足見えそめし幕の裾
手を支へ蛙になつて鳴いて見る
嘆きあへる足の下にも國があり
スライディングの砂けむりよし

◇ 中澤 濁水

押賣りへうかみ病人聲をかけ
洗眼器蓮を供へるやうに當て
石地藏 泰然として焼け残り
開院式 落選は今日釣りに行き
葱買つて我家へ急ぐ髪の出來
遅れるこ知りつゝ孫をあやす朝
覺まされて洗ひませうこ床屋なり

熊本 黄 蛾

買藥あまでやつぱり診て貰ひ

さつちへも付けず女房の二三日
溺れてる姿で玩具までミッき
しつかりに見せる久留米の上つ張り

◇ 松田 多 郎

虐けられた夫でも母ほめてゐる

あの念佛が今日はいくらになるのやら

◇ 櫻井 圓 角

藪醫者の進んだ醫學しやべり立て

發明家もう親にさえ見切られて

細こうはしてゐて株に手を出して

人様はそんなよい氣でないこ妻

臺所無駄するここ思つて居

◇ 若井 た け し

病床 吟 (二首)

いたつきの眼に本棚の殺到す

のさかなる日の樂しさに足袋をぬぐ

◇ 植田 湖 舟

米の値も知らずに瘦せて居るのなり

悪口の口の下から世話になり

須崎 豆秋

朝つから体操ごころの沙汰でなし
いちはやくオーバを脱いで風邪を引き
おゝ青空よ仕事がないのに
苦勞したあけくが今の雇仲居なり

◇ 松村 敏郎

誰が爲めにやつす五十のコンパクト
理髮所に驚をきゝて

◇ 谷村 稔

あはれさは異國を知るやホーホケヨ
みんなの手前酒はやめないとも言へず
艚の軋る音のみ午前二時の河
突込んさいちやあきまへんよミ洗て呉れ
一人居る淋しさ燐寸なき燃やし
風よそう吹くな煙りも疲れてる
字の拙いこを看護婦氣にしている

◇ 永田里十九

あんじてる程に奉公嫌つてす
揃へミ云ふを呉服屋心得へて
拾ふ手袋おもしろく右手なり
言ひ草は勝つて見せるミ云つたのに

丸山 公二

常になく子供を叱る氣のふさき
傍にゐて氣前褒るはへつらいか
からかへば唾を吐く程嫌ひぬき
貸してほしい札を揃へて讀んでゐる
疲れきつて戻れば金の要る話

○ 西村 市公

また肉かうちの子供の云ふ事に
きりりしやんご帯して女に會ひに行く
日曜に別莊街を歩いて見
表彰をされても働かねばならず

○ 上田 柳影

養老院こゝにも櫻咲いてゐた
何故かしら課長大學出をうごみ
金に抹殺されて今日も暮れんミす

○ 木山 青砂 郎

泣いてたのではない小説を讀んでたの
ウエーターの亭主で肺を病んでゐる
姿丈け残して茶店冬を越し
口答へせぬ女房を癪にさへ
操を賣らう幸福を求めよう
初戀の病氣に成つて見たくなり



迷へる人々へ

螢ヶ池觀櫻會席上にて

出口 雨 町

はなやかな句？ 淋しい句？

例によつて私は又私の女性觀から出發しよう。柳樽第二編の中に「氣違ひになつたで嫁の理が聞え」みたいな句があるが、實際過去の女性は社會に對し夫に對し或ひは戀人に對して意志表示の自由を持たなかつた。妻は夫に向つて言ひたいことの數々をその小さな頭に收めておく。そういう鬱憤が頭の中で混亂する時は勢ひ精神異狀も來すだらう。又階級的差別は娘をして、その愛する男に戀を打ち開けさせなかつたであらう。そこには必然的に戀病ひみたいなものがあつた。下つて明治、大正の時代に於いてはそれが「須磨の仇浪」ごもなり或ひはヒステリーごもなつた。やゝ新しい女にして「おなつかしい様……」ぐらいで初まるラヴ・レターが、かなり思ひ切つた表現であつたらうしかしく今日（こんにち）のモガは決して、そんなのろまな方法をさら

ない「私は貴方を愛します」ご卒直に言葉で表現することによつて戀人の意志を叩く。もしこれが叶へば、その日より二人のライフは始められるであらうし、叶はずばもうそんな男はきれいさつぱりご忘れて了ふであらう。そこにセンチメンタルな何物も存在しないこうした彼女の生活は明るい。何故なれば戀病やヒステリーがないからである。或る人は憎い／＼ご思つて居た相手を思ふ存分なぐりつけて「氣がすつごした」ご云ふ。氣がすつごしたごいふごは生活が明るくなつた謂である。このやうにして人間が自己の生活感情を偽らず飾らず卒直に表現しきつた時は、その生活はきつご明るくなるものだ。川柳に於いても亦これご同じごが言へるのであつて我々の「川柳は生活に役立つものでなければならぬ」ごいふ主張の一端も實に茲にあるのだ。悲しい時はその悲しみを川柳に表現し、淋しい時は

感情社會化の方法

その淋しさを、そのまゝ川柳に表現する。そうすることによつてのみ生活を明るくし得る。川柳雜誌は決して、淋しい句を作れども、はなやかな句を作れども言はない。たゞ、自己の生活感情をにじませた偽はらない句を作れよといふのみである。川柳雜誌がここに「淋しい句」を求めて居るさいふやうな誤呼を私はよく聞かぬが、そんなことはない筈である。或ひは「人生の究極するは所は淋しいものだ」といふ前提を置いての淋しい句をすゝめたことはあるかも知れない。けれども強ひてはなやかな句を作ることによつて生活は決して明るくはならない。それは丁度淋しい家庭を抜け出て、お茶屋で大さわぎをやることによつて生活を明るくし得たと思ふ徒輩さ少しも變らないのである。それは大きな自己僞瞞だ。川柳雜誌前月號の植田湖舟君の「初心者の迷ひ」で見ると、さうやら番傘がはなやかな句を作れと言つたらしいが、理論をきらふ番傘が山へ登つて、こつさりにお説教したのかと思へば笑はざるを得ない。更に同文中「境遇を明るくせよ云々」とあるが、藝術によつて生活は明るくし得るが、境遇は最早これをさうすることも出来ない。それを明るくするには社會革命の他に途はないのである。要するに我々の川柳は何よりも先づ生活記録の詩であり、思想表現の詩でなければならぬ。

我々が例へば旅行して美しい景色に接して來ても、それを自分一人のものにして終ふことは來ない。その美しさを出来るだけ多くの人達に分たうとする本能がある。或る書物を読んで感銘するところがあれば直ちにそれを友人に吹張する。盛んにすゝめるこの本能は強い。我々川柳家は川柳がいさも、うるわしい、きびしくした詩であるといふことを実感するに、もう我々だけの川柳として享樂出來なくなり、他の人々にも川柳といふ短詩を知らしめやうと努力するやうになる。これを「川柳の社會化」といふ。我々の感情生活に於てもこれと同じことが言へる。我々が物に應じ事に當つて、樂んだり、悲しんだり、喜んだり泣いたり等々。するだけでは、それは單なる感情生活に止まつて、そこには未だ藝術がない。私達がさういふ感情を一人より二人へ、二人より三人へ、更に多くの人々に分ち與へやうとする努力は遂にその感情に一定の組織形式を與へて藝術にまで飛躍せしめるのである。これは藝術創作衝動に關する一見解であるが、これに依つても、藝術と生活との關係、並に創作が決して單なる遊技衝動からではないといふことも明かに解るわけである。そして、これを先に述べた「生活を明るくする云々」を結びつけて考へてみるさかなり興味があると思ふ。

詩は感情から

詩が理性の産物でなくて感情の産物であるといふことは最早疑ふ人もなからうと思ふ。つまり知識されたものが詩の題材になるのではなくて、感覺されたもののみがその題材なるのである。例へば我々は死は悲しいといふことを知りすぎる程知つてゐる。しかしそれだから言つて決してそれが我々の川柳として詠はれはしない。我々の肉身の或ひは愛人や友人の死に直面した時に始めておさへ難い感情の發露としての川柳が生れるのだ。更に例を擧げるならば、本社の愚陀君に戀愛吟の多いといふことは、彼が生活の中に於いて、より強く戀愛を感覺してゐるといふことの結果である。愚陀君の知的生活は極めて豊富ではあるが、彼はそんなものをこねまはし詩にしようとはしないのだ。強ひて川柳にしようすれば「氷原 ぐらいの句は澤山出來よう。しかしそんな知的小細工に何の詩としての價値があらうか。もしかりに知識が詩材になるものさすれば、それはもう生の知識ではなくて熟しきつたものでなければならぬ。こゝに青い柿の實がある。昨日を經るにつれて、だん／＼色づく。つひには熟しきつた。折から風さしいふ外的衝動によつて地に落ちた。つまり知識が詩になるためには、こゝにいふ過程をたざらねばならない。この地に落ちた熟柿こそ詩であつて、青い知識の實ではないのだ。この場合の外的衝動は詩が生れるため

の必要なる條件である。

かつて私は或る女性から求愛の手紙を受けた。そこで私も返報した。そうしたレターの往復が數回ついた。しかし文面からの或ひは面談からの彼女に對する私の判斷は遂にその戀を成立せしめなかつた。判斷は理性的作用である。そんな所からは一つの詩材も得られなかつた。

氣持よく暗れた一九三〇年の初夏の午後だ。心齋橋筋から道頓堀へかけて斷髮のすが／＼しいステツプが奏でられてゐた。彼女等はもう求愛の手紙を貰ひたり男にすぎた女では斷じてなかつた。にもかゝらはらず彼女等のリファインされた、肢體、服裝、技巧が我々の感覺に如何に強く働きかけてゐることよ。そこから私達の幾つかの美しい詩が生れた。我々の周圍に於ける人事現象や大自然も亦このやうにして私達に何物かを放射しては居ないだらうか。私達の感覺に何物かを訴へては居ないだらうか。それを巧にキャッチするのが私達詩人へののみ惠まれたる特權ではなからうか。

何が新らしいのか

自分勝手に新興派を標榜してゐる「氷原」が我が「川柳雜誌」を目して中間派と呼んでゐるやうだが、これは少々ではななく大分おかしい話である。そも／＼新興藝術といふものが稱へられ出したのは最近に屬することであつて、それは必ず新興無産

階級のイデオロギーを代表したものでなくてはならぬ。この意味に於いて『川柳雑誌』こそ眞の新興派云はれねばならぬ筈だ。それが疑はしくは冒頭麻生路郎先生の近作を見ればすぐわかると思ふ。あれ程極左翼な、あれ程新しい川柳はないのである。あの句を理解し得る程の人ならば再びは本誌を指して中間派さと呼びないであらう『それでは一體何が新しいのか？』といふ疑問については誰しも一度は迷ひ一度は關心せねばならぬ問題であるから、以下少しく私一個の解釋を述べてみよう。

我々青年の思想は老人達が造つた社會秩序を維持してゆく上に都合が悪い。何故なれば我々は社會を時代を固定的なものにせず、それを指導して行くこととするからである。これは新しい思想だ。故に新しいものはその時代とは合はない、その時代に合ふものはもう古い。藝術も亦時代を指導する立場にあるから恒に新しくなければならない。時代と妥協した藝術は古い。現代プロ文學が新しい所以はそれが次代の社會主義的社會を來さんがための運動を主にしてゐるからである。戀愛が文藝の題材として何時までも新しい所以は、戀愛行動が往々にして、その時代の社會秩序と相容れないからである。ところが私が『古い』といふその同じものを番傘の人々は『新しい』といひ、私が『新しい』といふものを彼等は『新しい』といふのである（番傘三月號の巻頭参照）即ち、時代が思想を導くのではなくて、思想が時代を導くのだといふことを彼等は知らないの

である。

これを約言すれば、思想乃至藝術が……時代と合致した所には鬭争がない。鬭争のないところには進歩もなく、新鮮味もない。いふことになるとのである『川柳雑誌』は川柳をもつて大きくしたい爲めに、總べての川柳家に新しくなつて貰ひたい爲に、更にその新しい川柳をインテリゲンチヤに見せつけてやりたい爲めに、不斷の活動を續けてゐるのだ。川柳家の中には『私はさうしても新しくなれません』と言つて自分に見切りをつけてゐる人が可成あるやうである。そうした人々の爲に次の二つの事實を提供してみやう。

極めて傳統的な教育を受けて來た花子ではあつたが、家庭が經濟的に恵まれてゐたので、こもすれば世の流行に心が走りがちだつた。遂には母の涙ながらの意見も彼女の斷髮を思ひ止まらすことが出来なかつた。その結果自然と斷髮の女と交際する機會もしけくなつた。彼女等と共に語る。彼等と同じものを讀む。そうしてゐる裡に、傳統的だつた花子が何時か思想的にも新しいモダンガールになつてゐた。柳誌『ふあうすこ』がやゝ新しいといふ事實は、紋太氏が『川柳雑誌』の月評會で尖锐批評家に採まれて居ること起因するのだ。

新舊の岐路に立ちて迷へる柳人の爲めに、更新の惱みを體驗しつゝある柳人の爲めに、この拙文が役立つであらうことをひたすらに望む（五、四、六）



主觀句の研究 (二)

福田山雨樓

日本人の常食である米の精白に付て、近代都市の傾向はいやが上にも精白に精白に搗き立てるので、表面は如何にも純白清淨で美しくさわやかに見ゆるが、其の實質は極めて營養價に乏しい出し殻にしかすぎないものとなつてゐる肝腎の胚芽や精糠は白くなるにつれてぎん／＼失つてしまふのである。これは獨り精米屋の罪でもなければ、精米の機械化或ひは普及化の副産物でもない。全く米を常食とする日本人の味覺嗜好の變遷傾向の誇左でなければならぬ。否寧ろ日本人の非科學的迷夢の横顔である。しかもかゝる不合理なる精米の非を鳴らす識者の聲にも耳を傾けないのみか、世を舉げて上述の弊風に無感覺である現状である。けに救はれざる消極的自殺者の群云はなればならぬ。

われ等の川柳に於て、川柳が生活の藝術化であり、主觀を訴

へる尖锐なる詩の一分科であることに氣付き乍ら、尙且つその句作するところのものが文字乃至觀念の遊戯にしか止まらないとしたならば、之亦救はれざる戯作者の群を見放されても仕方のないことであらう。けれどもこれは單に遺憾なる事實として放任するべき性質のものではない、恰度米の精白過度が如何に日本人の嗜好の變遷に因由するとは云へ、苟くも國家食糧經濟並に個人の健康保全の見地から捨て、於かれぬないので同様、川柳の文壇の水平運動及其の本質的向上運動の發展打開を阻害する輕薄なる戯作的傾向に付てはあく迄之れが覺醒を促さなければならぬ。尤も川柳戯作者も各獨自の識見をもつておるつもりであるらしく、その句作の傾向、態度等に付て兎角唯我獨尊振り固執するものである。有名な茶根譚に「惡友交はつて悪くならないやうに心掛ける者もえらいが、初めから惡友

交はらぬやうに心掛ける者の方が尙えらい一云つたやうな言葉があるが、その反對に善良なる友達の忠言にも耳を貸さない頑迷者流は遂に救はれざる深淵に溺れずんば幸ひである。

俳句の大勢がまだ月並の域にさまよつてゐた時代には、その迷蒙さから一步を脱する勇氣と識見に乏しかつた見えて、堅く門戸を閉じてその中で月並調に熱狂し 隨喜したものである。大平の夢だつたかも知れぬが、藝術として何物をも残さなかつた。しかしこれは寧ろ當然のことであつて、當時の句作は一つの娯樂遊戯に過ぎなかつたからである。眞實の感激から流れ出づる人間の聲でなくして、風靡ミテふやうな懷念の殻を追ひ廻すことに終始してゐたからである。しかもかうした低級俗悪さが足元の川柳にも既往付き纏つて來たし、現今尙離脱し切れないのである。川柳をこしらへる職工の一派が即ちこれである（しかし藝術意識に眼覺めてゐられる筈の小説大家が滔々として、非本格的通俗小説を書くことに浮身をやつしてゐる現代なのであるからこれも亦已むを得ぬことである）云ふものがあるかも知れない。

人間は感情の動物であり社交的な動物である云はれてゐるが、一面又功利的な動物であるとも云へる。三圓で買ったものを五圓で賣ることに痛く興味を覺えると共に『筏乗り野を馬鹿々々しく戻り』するものである。短詩が必然的に陣痛する表現

苦をなるとだけ回避して、こしらへものゝ易きに走らうとする逆流のあることを悲しまねばならぬ。自己の生活に即した生々しい感激は、之れを言葉にリズムに表現すべく如何にも容易なわざではない。けれどもそれを表現し得た場合には功利を絶した歡喜ミ法悦に浸ることが出来ると共に藝術上の創作云ふ或る神聖な嚴肅な而して一種の快い興奮を感じる心持に入り得る筈である。この心持が通ぜぬ者には藝術尊敬の百萬言も要するに馬の耳に念佛だ。さるにても詩の表現苦を回避する邪道をおそれ戒めることに關心のないグループ、尙進んではさうした邪道に殊更這入つてゆく冒瀆者の群がやゝもすれば雜草のやうに繁茂し勝ちな柳壇ではあるまいか。

詩は美的な感情の意味（主觀）をリズム化した藝術であるが川柳は如何なる感情の意味を語る（或ひは此ひ訴へる）べきか即ち川柳を生む主觀の内容はどんなものであるかをはつきりさしておきたいと思ふ。俳句に於ける詩の本質が俳味ミ稱せらるゝ如く川柳に於ける詩の本質即ち詩的精神は所謂川柳味を指すものであつて、川柳を生む主觀の内容は取りも直さず觀照に於て川柳味を胚胎することに於て、換言すれば主觀の情緒に川柳味を觸發するところのものがなければ川柳の表現は生み出されないものである。更に約言するならば川柳味ミ云ふ母體からのみ川柳は生れるのである。

然らば川柳は如何、この質問に對して完全なる解答を齎すことは中々至難であるのみならず、これを求明することに當面の目的を持たないものであるから、此際は常識として一般に概念せられてゐる川柳の本質を表示し、併せて先進が喝破した川柳味の一端を紹介することに止めたいと思ふ。

- 可笑 味(滑稽、ユーモア)
- 穿 ち(機智、諷刺、皮肉)
- 輕 味(洒脱、諧謔)
- 眞實 味(主情的心理描寫)
- 寫實 味(焦點的、躍進的)
- 超趣 味(禪味、虛無的)
- 感覺 味(甘美感、尖銳的)

鳥田雅樂氏は曰く「……今日の私達の會得する限りに於て

は、川柳味の進展性こそ無限在であります、滑稽、諧謔、皮肉機智、諷刺等々の抽象語句の齎す内容にも、その綜合性にも理解を持たないで、かうしたものが川柳味であること、いさも容易に片付け去つて来た既成川柳家のいふやうな、わけのないものが川柳味ではありませぬ、それはもつとく内容に廣さ深味のある、恐ろしい進展性を含んだものであることをお互ひ信じ、てよいと同時に、それは今後のお互ひの自重と、努力のうちに己がじつ、芽生えて行くものであることも疑つてはならぬのであります。今若し川柳味といふものが、あの上ツ調子な、面白味や可笑味を無批判に享け入るゝだけのものであつて、その外

に何等深い見方も、發見もない概念化そのものであるとしたら私達は到底今日こゝまで引き入れられては來なかつたでせう。そして之から先へ進む氣力も既に失くしてゐたでせう。

が私の淺い研究に於ても、川柳自體が有するところのテンペラメント(私はこのテンペラメントといふ言葉を而目といふほどの意味に解して置きます)は、私自身の創作や、鑑賞の過程に於て、常に何かから反映的な心境を作つて呉れました。その創作或は鑑賞の場合の反映作用は、感得するこいふ心理的言葉は反對な適當な、言葉でいへば味得するこいふやうな智的な意味のものであり、それは感じさせるものであると同時に、考へさせるものであります。

私の魂は感じると共に考へて居ります。それは感情の世界のものであると同時に、理智の世界のものであります。感情と理智の織り込まれた心境であります。その味解の焦點は情智の交錯する一點であります。謂はゞ情智一如の心境に於て私の川柳が生れるのです。

私は主情とか主智とかの、何れを重しとは考へない。現代の心理學が未だ證明しては居ないけれども、私は情智一如の世界のあることを固く信じるものであります。

川柳美乃至川柳の美的なるものゝ構成に當つては、常にこの智情一如の心境から發する持味が参加せずには歌まないのでは

ります。それは凡ゆる詩がその性質上有機なる味の添加を拒むことが出来ないといふ、同一の原理の上に立つものであつて川柳が川柳としての持味を有するといふことは、そして特種の味解を要するといふことは、たゞそれだけの意味に於ても信じられてよいことだと思ひます。

私は今や私達の川柳が、智悟一如の心境から生れ、そして理解さるべきであることを識りました私達の川柳は單なる感情の所産ではありません。もつと深い理解の領域をも包含して居るのであります。であるからそれだけでも川柳が川柳として他の短詩に拮抗してより以上伸ぶるに都合のよい立場を擡つて居る

鈴蘭の君を悼む

杉原吟女

陽春四月はなやかな川柳雜誌に微笑みつゝ眞をくつて行つた時、思ひもかけぬ欣女様の悲しい御永眠の御報らせ、まあごんになに〜驚きましたでせう。まだまだみゆる時を得なかつた君なれど、同じ世に住む身には何時の日か、お目にかゝれる事と深く信じて居りましたものを、来る春も待たて可憐な花は天のみ園にうつし植えられたとは、あまりにも若くあまりにも清らかに

召され給ひし君をしのぶ時、心のかぎり名残惜しまれてなりませぬ。さこしえに御誌に立派な御句を拜見する事の出来ないと思ふさほんごうに淋しい事でございませう。光澤抄の皆様方もごんになにか悲しみ惜しまれて居られるでせう。同じ名に生れたそれさへも、何か深きえにしが有る様に考へられまするに、まして川柳に編物に又同じ信仰に生きる君と承わつては、じみん〜さ一時を川柳に信仰に編物に語り度いとのみ願ふて居りましたものを。

清らかな御最後を承わり短かかりし廿八年の一生に人々の胸に、或る何物かを残して逝かれし君の信仰のたうたさに、あま

りにも我がもるき信仰の恥かしくてなりませぬ。天のみ園にうつされしすゝらんはもうくるししみもなげきもなく、常世に香り高く輝かれる事でありませう。されど残されし昔の君の御なげき、肉身の方多くの友だちの御悲しみを思ふ時、涙がつかませぬ欣女様何時かの日〜天のみ園で、お目もじしてじみん〜と語りませうれ。

あまじにも名残惜しさに一筆かゝせて頂きました。

今日よりは天のみ園に香る花
春の嵐戸た〜く夜
魚崎の里にて 吟女

ものご謂はねばなりません。私達が新しきものへの進展性を認めるのも、そこに多分の理由を持つてゐるのであります。(後略)……大正十五年九月大正川柳第一五六號に據る。

われ〜は膳に向つて飯を食ふ折に、誰でも箸で一口宛り啜に口へ運んでゐる。そして丹念に嚼み且つ味はつてゐる。それをわれ〜の血さなし肉みなさんが爲めに。しかし精白により極度に削減されてゐる米の營養價の如何を定めてから口にする程自己へ親切なものは先づない。

川柳の鑑賞に於て、その一句々々を通過さす迄に必ず、一歩遡つて川柳味の検討を忘つてはならぬと思ふ。それはやがて句主の主觀に交流する親切さに外ならぬからである(續く)



一路集

(募集句)

水

汁粉ちみ水の勝つてる味になり
 鶏が水飲む様の有難し
 水騒動對陣のまゝ朝になり
 来る迄に半分になる氣附水
 空白のやうに鶏水を呑み
 旅の宿水のいゝのを下女に言ひ
 足先を浸して見たい春の水
 一滴の水の強さを見る波紋
 野にくれば水の音から春めいて
 もくもく湧き出る水に命あり
 水浴びて籠の小鳥の氣嫌よし
 遠足へ寛の水の番はこず
 水鏡漫語のやうな俺の顔
 ホースから今水が出る首になり
 大根を洗ふ白さよ冬の水
 水垢かゝて一服春へ喫ひつける
 華かに踊り疲れてソーダ水

吐句坊 青笛 利春 空山 菊路 今雨 青柿 仙人掌 公二 樹光 輝翠 黒天子 雪峰 麥魚 四五鷹 四方路 紫石

大島濤明選

繪にほしき山水なき柄でなし
 貸ポート水の都を夏にする
 水さすも少しは戀の淵にふる
 撒水車大道一ぱい横行し
 うづの中何か出そうな水の色
 水加減覺えた飯の二人前
 雨垂を視に受ける日曜日
 戀のポート明るい水をよど漕ぎ
 輝の手を父のいたはる水仕事
 腹ばひになつて谷間の水の味
 一滴の水緊縮をした丸味
 かたくなの父がお水呑ま言ふ
 舟唄に琵琶湖の水のぬるみゆく
 雨垂の水の強さをじつこ見る
 水すましそう動かねば食るぬ
 ソツミする深さを水の色にみせ
 水鐵砲十からびたまゝ病つゞけ

樂之雨 新水 吉祥 汎堂 春峰 桂枝 石流子 憲坊 成馬 春芳 太路 圓角 紫電 英賀夫 鯉友 清路 虛白



杭全町
MEMO
 雨縁

▼海野夢一佛君から、東京復興祭の執行せらるゝに臨み大震災當時本社及び關西川柳社が主催になつて川柳家諸氏へ同情金を送つたのに對して感謝の意を表して來られました。句に「三月の向ふに踊るものばかり」

▼本社小松支部の所在地石川縣小松町は去る三月廿八日午前二時半出火して、六百餘戸をなめつくしその中に梶井井々樓、野村松永の二氏が罹災されたそうです、同情に耐へません本社有志から見舞金を送ることにしました。

▼松山支部では四月十九日大島吟行を催し津倉の川柳家を訪ねられたそうです。

▼同人福田山雨樓君は三月廿三日郷里岡山へ暮參に行かれたさうです。句に「草と木さ麥の青さへ呼びかける」

▼鳥取支部では五月上旬川柳展覧會を催すため幹事の鐵洲君が四月七日に本社へ相談に來られたさうですが、僕の宅では本年から尋常一年生へ入學した長女が、病氣をしてゐて赤十字病院へ行つてたので、合ふことが出来なかつたことが残念でした。私の子供はすぐ全快して學校に行つて居ます。

撒水車女の悲鳴聞いて過ぎ
水少しこぼして金魚賣は去り
覺悟した水浄土まで透きこぼり
醉さめの水はつきり今朝の音
芙蓉
内匠守
光路
一念坊

佳句

水の色今さら罪の恐ろしく
疑獄ちこ生んで水道出来上り
蛇の目から紅がこぼれる水溜り
バラソルに水撒く家の多い町
縁談ありて水色の空
命あるかに水の逆まく
死の神の水美しくしき魅惑
グラスの中の水の静けさ
水垢離の水の利益が間に合はず
鐵橋の上から水をふこ怖れ
方眼
柳兒
登美坊
艶笑
たけし
竹雪
吉絃堂
さちを
不然
與志雄

拔足

○鳥獸其他の動物

近づいて来た拔足へ犬は立ち
足音を忍べば犬に見すかさね
拔足で来るのへこんぼ場所をへ
(佳) 拔足へトンボ^{ポたん}羽根^を下げ
しのびよる猫に個性を見付け
拔足の波にメダカは陰にゐる
拔足の手を飛びかかはす寺の鳩
虫の聲もう一足ではたき止み
一柳
湖山
柳兒
光路
湖山
公二
夜童子

松盛琴人選

○音響

(佳) 拔足のヒヤリこ一時うった音
拔足の床踏み出した音をきく
拔足へ新らの疊の音がする
夜遊びの氣兼ね梯子音を立て
拔足へ廊下素直に音をたて
拔足の胸に響いた鐘を聞き
拔足へ身體の縮む音のして
密談のふこ拔足の音を聞き
青笛
吐句坊
豆秋
山茶花
清路
桂枝
鐵洲
與志雄

秀逸

手向けた閑伽に子子のわく
水瓶へゆらく春の陽があたり
エゴイスト明日咲く鉢へ水を
從順の水に怒濤の日もありて
水草の氣まゝな風に押しやられ
麥角
青兒
不然
青水
山茶花

浮草の枯れては水に浮ばれず
葉の先に今一滴になつた水
春や春、水は柳に話しかけ
疲れきつた水をためてる海八丁
其慾に末期の水こいふがあり
水暫し激するまでの淵こなり
流水の落葉を押しして何處へゆく
命こる水こ思へぬ清らかさ
醉ひさめの水に我家こいふ意識
紅柳
多聞
勝二
鐵洲
光路
茂都子
多郎
光哉

▼富士野鞍馬君は四月六日霞ヶ浦から筑波山へ、同日九日伊勢參宮に詣でられました。句に「伊勢音頭行儀のわるい踊りやう」

▼前田五健君は全國野球大會のため來阪されてゐましたが會ふ機會がなかつたのは残念でした。

▼京都五社聯合川柳大會を四月十五日午後五時から京都市御池木屋町昭和圖書館で催され本社からつらひし、愚陀、たけし、の諸君が出席盛會たつた由。

▼廣川番翁君は宮島方面へ旅行されて四月五日夜吳市浮舟吟社の主催で歡迎小集會を催されたことを知らして來られました。

▼金澤の宮本銀砂子君は三月芽出度華燭の典を擧げられたさうです。

▼中野裸人君の宅では四月十一日夜男の子をもうけられましたお喜び申します。

▼川合舟々君は三月十八日金比羅、屋島、栗林公園へ遊覽されました。

▼鐘紡の河野双車君は減給問題を餘外に一句を残すこゝに努力してその熱心さを知らせて來ました。

▼竹田芦穂君は四月十日水戸偕樂園から松島方面へ遊覽されました。

▼加納山茶花君はほんとの妹を連れて郡山城跡花見に行かれたさうです。句に「戀人さくれば夜櫻明るすぎ」

本號編輯は路郎先生、ひろし、亂耽、雨町、愚陀、杏三の諸氏と私とで致しました。

轉居

すゞめ吟社は東京府下澁橋町角管七三五へ、

○立間と聲

あいつ奴が悪るいこ
 振足聞いて
 (佳)振足は腹の立つ咳して歸り
 振足をヒヤリさせせる咳拂ひ
 振足を聞たか聲の細りやう
 振足でゐるのに母に呼ばれたり
 (佳)振足へ隣の親鸞聲をかけ

○病

足で病室を出る見舞客
 振足で割つた氷を持ちて来る
 病室を目交ぜでひこり風呂へ
 往診の部屋へ振足して這入り
 感胃の子へ振足で風呂にゆき

○乳兒と小年小女

(佳)振足を見附けねえさま事
 振足で覗けば坊やさめてゐる
 振足で覗けば赤ん坊笑ふてる
 微笑んで振足母の脊をねらひ
 振足は寝た兒の側へ用があり
 子供の振足にはゝゝゝむ
 振足で来た子へ目隠しされて
 振足の弟へ妹又つゞき
 (佳)振足の笑ひくづも迹で来る

○息子其他雜

振足は母に叛いた夜を歸り
 振足で出るのを母は知つており
 振足は眼鏡へ少さく見付けられ
 佳怒つてる事を知つても振足

紫石 輝翠 春峰 圓角 茂都子 鳴玉
 菊路 豆秋 光路 四五磨 青蛙
 光路 成馬 青水 空山 芙蓉 英賀夫 月人 艶笑
 市公 憲坊 勝二 青兒

振足へ親父の顔がひよいこ出る
 裏口の振足店に父が居る
 振足で歸つた前科ある男
 振足の冷んやりこ知る隙間風
 振足のわれのおろかを唾て見る
 振足を不安がらせる仲人口
 振返る振足に星落ちるなり
 人世を振足で行く氣の弱さ
 暗がりへ来て振足はほつこ居る
 振足のやうに靜かな白い足袋

○戀愛

振足を脊に感じて待つてゐる
 目隠をされて脊後へ意識する
 (佳)振足の想思の仲に笛が鳴り
 振足ははがゆい事も聞かされる
 振足と振足かたく手を握り
 (人)振足の合圖俣が俯つてゐる
 (地)振足のおしろい香か意識
 (地)白粉の匂ひが先き忍び寄る
 (天)振足の未練へ月の明るすぎ
 (軸)振足へまた口笛が高く鳴り
 選後にし振足さいふ事に深い思索の勢を取
 得ざりし結果か種々の作句資料を求め得て
 もそれが多くは生まの儘使はれてゐた。要す
 に燃焼されてなかつた。消化されてゐなかつ
 たさ云へる。今振足の作句資料とも見るべき
 取材を拾つて見ると鳥獸動物類が六三、音響
 五二、立間及隙見一〇一、息子夜遊びの類が
 一二五、隠れんぼ、刑事、泥坊等が二八、小兒

六戸左行氏は東京市外澁谷代官山一二へ、出
 口雨町君は岡山縣高梁町局止、石川双葉子君
 は大阪市西成區粉濱本町四丁目六〇へ、近藤
 テルホ君は大阪府西淀川區海老江上四丁目
 三へ、森田輝翠君は、大阪府天王寺區細工谷
 町五八へ、村野蒼梧樓君は東京府荏原郡大
 崎町谷山二一三へ、尾崎海洋人君大阪府西區
 南堀江下通二丁目へ、上岡余里雄君は大阪府
 港區南安治川通二丁目眞下方へ
 ▼蛭子省二氏は光洲湖南町七四と町名改稱

改號

河野紫電君は双車、壺井一羊君は木羊
 大島青兒君は無冠王

正誤

▼四月號二三頁
 いと赤き墓場の眞上なる椿、 山雨樓
 ▼同 二五頁
 變形的さあるは典型的の誤
 ▼同 四五頁
 牛のほそりに蠅が一匹二匹三匹 兩
 ▼三月號二十二頁「同じ血が通つて居るさ君
 思へ」は「同じ血が通つて居るを君想へ」
 徹」の誤り
 ▼四月號四十五頁「肉だけでいばる夫と思つ
 てゐ」内だけでいばる夫と思つてゐ杏三」の
 誤り
 ▼四月號四十八頁「湯の街道後へ」の内「アデ
 ニー」は「アデュー」の誤り

乳兒八二、父、母、咳、聲六九、天象一三、躰き病、泥濘三九、廊下一五、戀愛五三、其他數種類て如斯多種の取材あるに不拘、出句總數に比して充分の効果を舉げ得ざりにしは、課題が狭いさいふよりも、題詠といふ事を輕んじた爲めではあるまいか。殊に拔足さいふ題に姿

保護

鮎美選

○ 子に保護されて父兄會に來る 春夫
保護者となつて舊師に會ふなり 利春
保護されてはつきり軍旗ひる 石流子
草に住めばその草色に虫生きて 明佳
女何心なく保護をうけ 豆秋
保護された女白粉はけてる 市公
保護されてゐる身不幸を知つて 方眠
保護者のひこり咳にむせてる 新水
伸び出する力へ保護の重たすぎ 多聞
保護さ云ふおつかぶさつた暗 同
遭難者手厚い保護へ眠つてゐる 吉絃堂
保護するさ云ふ留置場の冷へ 同

五 客

電燈の明るさ保護の身にせまり 鳴玉
指先を視つめつゝ保護疲れてる 海洋人
三方の壁をつめたく保護をうけ 勝二
保護者諄々さ背中の方がぬく 多聞
保姆の草履の重き日もあり 新水
(人)狂人の笑ひも保護者さびび 新水
(地)保護の目に星ひみつゝ消 海洋人

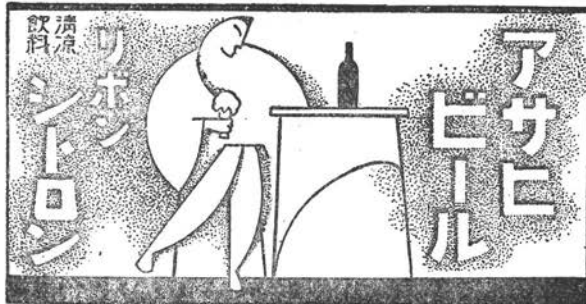
を取材としたものが非常に多く、之等は千遍一律にて同想句夥だしく、且つ佳句に乏しかりし故 大方没の止なきに至つたのは遺憾であつた。一路集は諸君の川柳道場ゆえ益々研究努力し、川柳の極致まで把握してほしい、聊か参考迄に述べた。(琴人)

水谷 鮎美 共選

(天)園兒の顔も陽もまろく たけし
○ 保護者となつて舊師に會ふなり 利春
保護帳を見せて鮮人一つ 賣れ 今雨
子に保護されて父兄會に來る 四方夫
出世してもらひたくは保護願ひ 成馬
保護の名に堪て腹をふくらませ 豆秋
女何心なく保護をうけ 方眠
保護二人は添へる事になり 紫電
母親がこつそり出した保護頼ひ 多聞
伸び出する力へ保護の重た過ぎ 市公
保護されて居る身憎まれ口を 同
保護の虫よひがんでゐるの 同

五 客

三方の壁をつめたく保護をうけ 勝二
指先を視つめつゝ保護疲れる 海洋人
電燈の明るさ保護の身にせまり 鳴玉
保姆の草履の重き日もあり 新水
保護者のひこり咳にむせてる 多聞
(人)保護者諄々さ背中の方がぬく 新水
(地)保護の目に星ひみつゝ消 海洋人
(天)園兒の顔も陽もまろく たけし





粒

々集

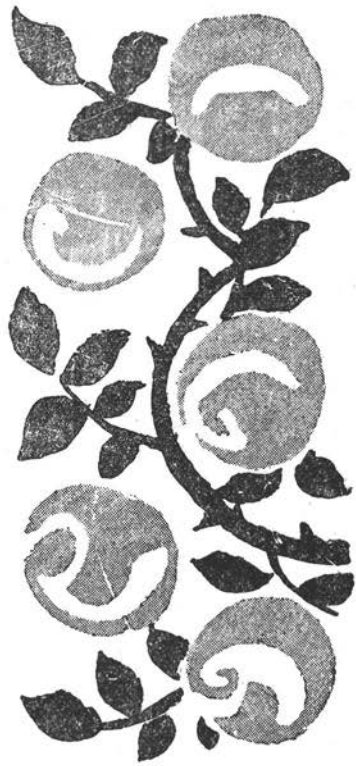
御影 長崎柳秀

吹けば吹け明日は港ぢや横濱ぢや
すがらうが泣いて居ようが牡丹刷毛
榮養がさうのこうのこ試験前
榮轉を訪へば意味ある笑ひ方
まつすぐに戻つて淋し春の床
二日丈け光秀になる薬理會
學士ならお嫁にやるも一昔
融通のつかぬチョン脱け手を合し
ほんさうに負けてチョン脱け
安井欣女の死を悼みて
一夜の風に散りし白梅
安井寛氏を思いて(三)
箸箱の一つは淋し膳の上
温度表死ぬと思へぬ下りよう
妻の死に教へられたるこも多く

○ 松山 前田 五健
轉宅に刀のないは帯持ち

貰ひ風呂蛙の唄も悪るくなし
片假名で子にやるはがき旅でかき
飛んだ爪硯で終に手を汚し
脊高の寝ても起ても笑はれる
小氣味よく割れた薪へ鷄が飛び
陳列の眼を外らし見よ春の月
○ 大連 佐々木三福
算盤の音を離れて碧い海
兒の無理も樂土よ汀手を連れて
闇の手はすきを與へず押せまり
○ 東京 富士野鞍馬
縣廳へ通ひ長男無口なり
團体旗三年坂で晝にさがる
飽き性の又も貸間をさがして
電車の中で妻叱る野暮
行員の頭の悪さ覗かれる
洋傘が杖になる程年をこり

BUILDING



KOSHIEEN MANIA

住 田 亂 耽

電車は人間で眞黒になり、車掌は甲子園まで黙殺された。

KOSHIEEN 野球の宮殿、電車から吐き出された人間は蛇になつた。春は夏の大會の前奏曲だ。人々はその前奏曲を足音にこり入れて心臓をいがめながら速歩。それ等の人々の間を、色々の小商人が點綴してまごころに春もあはたらしい。

圓形運動場の底では小さな野球人形が珠ご戯れてゐる。多くの人々は實に多くの多忙で有閑な人々は、この神秘に陶醉せんとして娯集してゐる。

やがてサイレンがなり、拍手が起る。潮の加き拍手。人々は一つの海になつて大きな感激怒濤を作る。試合開始だ。

S 商業ミK 中學の一騎打。K 中學の生徒は、その制服と同じ色の聲を絞りだしてプリーチから、グラウンドへ投げかける。

大甲子園はしばらく彼等の聲で黄色に化して了ふ。之に對するK 商業の應援は神戸らしいあか抜けがしてゐる。チームミチームの對峙、應援ミ應援の對峙。一で觀衆もはつきり、ごちらかの味方になつて夫々の拍手を起す。拍手の波。拍手の波。

白球は碧空へ拋物線を畫いて人々の心をかくらんする。スコアボードには、夫々の得點がいとも儼然な數字を表す。ストライク、ボール、アウト、セーフ、人々はボールが三つになればごよめき、ストライクが二つになるご歡聲を擧る。ごにかくベースボール・メーニヤの中に自己を投出して了つてゐる。私の魂は之等の聲の洪水の中に、さうくあの鉄傘の上までうつかりより上げられてしまつたのである。野球はごちらかゞ負ける。

人々はこれに奇蹟の出現を希求してご

よめく。敗色漸く濃いK中學に聲援する
だがそれは無駄だ。結局神の審判の手を
信ぜねばならぬ。遂に四對二、冷たい數
字が戦蹟を物語つて戦ひは終る。サイレ
ンが鳴る。拍手が起る。甲子園は何でも
拍手だ。

拍手メーニヤである。樂隊がすさんだ
人々に一脈の清涼劑を投入する。人々は
又次の試合までの長い時間を、實に氣長
く待つのである。

之等の無数の男性に混つてK・STEIN
への赤い女性のバレード。甲子園で見る
女性はベルシヤの花の香ひを投げかける
世に惱みある多くの女性よ。一度はKO
SHIENのBIG-PARADEを起せ。さう
すれば、世の多くの愚かな男たちは、貴
方たちを好奇の眼を以てふりかへるのだら
う。さうすることによつて、さういつて
は失禮だが、美しくない女性はやゝ美し
く觀察され、美しき女性はよりけだかく

見られるプロバビリテイが、九十パーセ
ントは確かにあるから――。

断片三つ

尾崎海洋人

自分は大い方の眼鏡を覗いて見た。
生き様として居る人間を見た。

自分は小さい方の眼鏡を覗いて見た。
其處では蟻がセツセ冬冬の仕度をして居
た。

土筆をポキン三二つに折つた。
そして溢れ出る水分と共に其幹を思ひ切
り鼻へ押し付けて見た。

そして自分は其快い春の匂に勝利者の
様にニタリニ笑つて見た。

小さい子供が仕事して居る若い男の傍
へ走つて来た。

『あなた等惚れてもらふのん乞食かあ
らへん』子供は大聲で叫んで元きた方へ

走つて歸つた。其處では十八九の子守が
顔をゆがめて待つて居た。

何處へ行く

出口雨町

府下中學生の制服がカーキ色に統一さ
れた洋服屋が俄然生活をおびやかされた
だがそんなことはさうでもよいのだ。青
年團も軍人も皆同じ色だ。軍國主義的合
理化だ。滿洲の山は禿てゐる。滿洲は日
本の富源だ。おゝ！日本の帝國主義よ何
處へ行く？

武藤山治に退職慰勞として三百萬圓贈
らなくとも彼は決して餓死しないかし
今度の減給問題は勞働者にまつては正に
死の宣告だ。社藤夫人千世子が女工代表
に與へた温情は『不満の方は國へお歸り
』といふのに過ぎなかつた。

武藤夫人のヒツリメンのジュエバン
紡績女工の血と涙 (デカンソノ眼)

ミ云ふのがあるが實にうまく言つたもの

だ。拙吟ながら私も一句捧げ奉る。
貴夫人はこの現實を知るまいか
鐘紡争議よ、いつたい何處へ行く！

我々の隣人が戀人が或は歴史が無自覺に動こうとする時は私は「何處へ行く」ご詰問したい。そう云ふ責任を私は感ずる。何故ならば我々プロレタリアートこそ歴史の正しき編纂者でなければならぬからだ。(五四・二三)

街に住めば

高橋かほる

憂鬱其ものゝやうな拾ひ屋の收穫の炭俵からこま糸が落ちた……それがころころ引かれて行きます。お三輪がつけた小田巻きの糸の様に……。

親切週間

福田山雨樓

私立岩倉鐵道學校の校舎がその昔東京上野の一隅であつたころ其の附近は貧民

窟見たいな家並に圍まれてゐたので當時の校長は、火災類焼の危険を痛くおそれて當時のコンクリートの權威者を煩して高大なる防火壁を校舎の周圍に建設された。ところが其の竣工式があつた日の當夜圖らずも當該學校から出火して校舎を全焼してしまつた。しかも防火壁は完全にその威力を奏して附近の民家には何等の危難がなかつた。恰度こんな風に分の方のこまは可成り自惚れ勝ちになるものであるが、鐵道のサービスの如きもまだ改産するところが決して尠くないここに氣付かなければならぬ。云々……去る三月十一日から一週間鐵道省で設定された親切週間の第三日東京から鐵道大臣の代理として久保田運輸局長が關西地方の親切振りを視察の爲め西下され、鐵道局に於て訓示の一節！

門外漢の見た川柳

小島素心

私はまだ川柳に關する何等の經驗を持たない。昔の「柳樽」に云ふのも一度も見たことはない。その私が二三日前に雀友住田君から「川柳雜誌」を貰つて讀んで見た。未經験の私によしあしの判別のつきそうな筈はないが「近作柳樽」や「川柳塔」の中からとてもいい句を發見した。それですつかり川柳に云ふものに惚れ込んでしまつた。然しこのいい云ふ意味を、何故か聞かれる返答に困る。何故よいかは自分には判つてゐる。然しそれが川柳の約束に對しての邊まで接近してゐるか、又は素人としての丸つきり未知の自分勝手な境地から來てゐる味はひなのか、自分にもよく判らないからである。それでもかまはぬからあからさまに言ひがよかつたか云ふて見よになればまづかうなのである(澤山にあるが紙數の都合上その内二三句を舉げてみる) 馬市に引かれ行くのか鞍もなし 規堂一寸俳句の様である。いや私は俳句も

かうありたいと思ふのである。中七の引かれ行くのが非常によく働いてゐていゝと思ふ。この中七の持つリズムは一寸すら／＼行つた無技巧の様にみえて、實は作家の可成り苦心の末になつたものだと思ふ。もし何の苦もなくすらく／＼運んだものだと思ふれば、この作者は天才云々云はねばならぬ。下五の鞍もなし云ふ説明は、詩としてはあまり大切な條件をしない。けれ共この句は、この鞍もなしに云ひ知れぬ象徴的哀調がある。川柳に未経験の私は「この味ひだな」思つて新しい川柳のある約束にいくらか近づけたよな気がする。詩としての説明の厭であるこの鞍もなしも此處に到つて強ち馬の句だけでは無い象徴的強みも深みをもつてゐる。

叩けばたゞく輕き袂よ 愚 陀
輕いユーモアである。上品な表現である。叩けばさしてたゞく假名を使つてあるところにも、この句を輕快な上品

なものにしようとした、作者の細心の注意が拂はれてゐるここがうかがはれる。兩性の別を文字で表現されてゐるのである。上品な輕いものは、かうした細かさから生れるものである。

青空がうつらうつらなりぬ靴の先 亂取
この句の上五の「青空」は非常に範圍の廣い表現である。そして中七のうつらなりぬをこの「青空」を使ひたるが爲に大きく生かしてゐる。よき（川柳云ふ）小曲詩である。みすほらしい靴先の艶の失せたエナメルから、こんな新しいこんな偉きな言葉が生れるとは誠に嬉しいことである。

よき詩人は常に新しい言葉の創造者である。詩はよき新しき言葉の表現である。そしてその短章の内に美はしく或は哀しき長き物語を秘めてゐる。
私はこの靴の句に秘められた物語を述べてみる。
春だ、眩ぐらしい春だ。この願、そこ

の劇場 あのカフェーにも、物質の固形が光さ色さ肉さ匂に碎けて亂舞を始めたそれは尊い黄金を、紙片を染めた薄つべらな造り花繻に替へて撒き散らして、自然の櫻花に對峙する哀れなブルの踊りである。

それらに無關心な自然は、靜かに冬の青色を春の桃色のカラーに替へてゆるやかな光を春のをぎりのステロジに投げかけた。さ、野の草々山の木々の舞踊は始められた。小鳥の音楽、花の踊子、緑の衣、光の交々、自然の舞は、酣である。人々は綺羅を競ふて。

この自然のステロジを前に「春の舞踊」の観客となつた。哀れなる彼はあまりにもみすほらしい自分に氣附いた。時、彼はもう踊を見る気にはなれなくなつて来た。彼自身のみすほらしいさは彼自身を多感にした。そしてうなだれた彼の眼は、ふみ見ざるもなしに彼の靴先の光の失

せたエナメルに止まつた。

彼はこの靴を新調した時の事をまた想ふた。カンガールの先エナメルも今はもう光失せ色あせて了つてゐる。曾ては晴れやかな顔も寫つた。カフエーの色電燈にも輝いたこどもあつた。エナメル、それが今は磨いても光を放たなくなつたのである。

さて、これからがまた、そうなつた迄の間の長い物語りになるのである。

私は詩を（川柳も私は詩と思つてゐる）それ程長い物語であると思ふ。

若い心

丸山公二

一五・三・三〇一

重々しい冬の衣を脱ぎすて、所謂尖端を歩む魅惑的な女性が人波をつくつて行き交ふ。うきたゝす様なジャズの騒音に仄かな青春を意識して或種の感じを味は

ひつゝある時、我が鼻をかすめて行く芳香、顧みれば遂へて歸りか行くここか。

金が仇の紅裙が坂町の方へ。道頓堀の宵は、餘りにくエロチックだ。何かしら本宅へ呼びかける、ポケットを押へて見た、金はある、其の金は明日要るのだ。けれど若し今夜限りの命であつたら、××死のおかしな岐路に立つた俺は、親愛なる雨町君の句を思ひ浮べた。

殊更に道頓堀の裏を行き

適切な句におをまき乍らすつかり共鳴して苦笑しつゝ『万よし』へ足を向けた。

一五・四・二一

放縱と咳嗽

若井たけし

最も放縱な生活のなかに、大自然を見出すことが出来る。

× ×

藝妓の咳嗽は、資本家への嘲笑でありまた、哀願であり、號泣である。

ごなり同志

赤木春夫

隣家ごいふものは、殊に都會生活の隣家ごいふものは、隣家同志の關係以上の關係には進展しないけれど、所謂隣人の親しみごいふ感じは決して悪いごいふはな

い。
「貴郎、晩にたくお米が無いけれど、ごうませうー」
「隣に借りて置け」
これで晩の飯にも有りつづける。

それご同じごいふを、向ふからも云つてくる。
「お互ひ様です」
東京を食ひ詰めて、私達夫婦は京都へ行き、或る家の間を借りた。隣の間を借りてゐるのは、祇園あたりを流して歩く按摩さんの老夫婦だつた。夫婦ごいふよりも茶吞友達だつたかも知れない。夜お

そく歸る頃になるに、老ひたる彼女は、
電車の終點まで主人を迎へに行くのが例
となつてゐた。『生きた杖』となつて働
くことが彼女の仕事であり、幸福感もそ
こから湧いてくるらしい。こちらの若夫
婦共は、明日の米代にも詰り乍ら、朝は
十一時頃まで、時には午後になつても、
まだ床に這入つてゐた。無論冬のこと。

『アキレたもんや』と按摩さんが云つた
『若いうちは仕方あらへん』老細君の聲
だ。

『隣の按摩さん、嫉いてゐるんだね』
私は可笑くなつて、耳を襖の側に持つ
て行つた。

そのうちに妻が先きに起き出した。椽
側で炊事をするこゝになつてゐた。

お早うございませう

『お早うさん』

妻は老細君の挨拶だ。

袋から鍋へ、小豆が何かを開ける音が
した。

『よく洗はんごいかんえ』

按摩さんが部屋の中から云つてゐる。

『ハイ』

庭には昨夜からの雪が積もつて、その
上はまだ降り止まない。

『オ、冷めた』

老細君の聲。

『音だけさせよけいゝわ』

妻の聲。

『誰れだ、音だけさせよけい、なんて、悪
いやつちや』

按摩さんの怒聲だ。

椽側の聲は鳴りを鎮めた。妻はきつこ
笑ひを噛み殺してゐるに違ひないと思ふ

こ、私は床の中で龜の子のやうに首をぢ
めて、思はずクツクと笑つてしまつ

た。

『誰れだ、笑つてるのは。人が目が見え
ん云ふて、莫迦にすな、今時の若い者は
生意氣至極ぢや、え、莫迦にすな！』

妻が障子を開けて這入つて來た。ホー
云つたやうに眼を丸くしてゐる。

『そうおこらんでもいゝわな、今、うま
うお汁粉作つて進せるさかい』

老細君の少し甘へるやうな聲がした後
は、暫らく静かになつた。

『しまふた、わし、昨夜、お稻荷さんお
詣りしたかしらん』

『しましたも、毎晩のこゝ、何忘れま
すかいな』

『左様か』

老人の安心したやうな聲がして、それ
からすうと沈黙が続いた。

。 。 。

將棋

辰巳 籬楓

或月の夕方の事。けたたましく電話のベルが鳴るのできき、同僚のMと云ふ男にMの十年の友Hからの電話であつた。早速給仕をして取りつがしめる。事件をきいて置きこの返事、でその事を先方に話す。是非本人に出てもらつてくれ云つてなかく、用件を云はない。そして、一体Mは何をして居るのか聞く、そこで何の氣もなく、ありのまま、將棋を打つてゐるらしい。云つてしまつた。するにHは是非電話口へ出てもらつてくれと語氣を強くした。で又Mを出てこないで受話器をはずしたまゝはつて置く。やゝあつてMはあわだぐしく電話室に現はれて受話器をこつたがもう切れて居た。

Mはその約束が、にこたへたので、その後すぐHに電話をかけた。Mはその云ひわけに曰く、ちよつと手ばなし難い用事があつたので、M、それから何か云つて居たが、しきりに手をかへ、をかへ云ひわけをしてゐる。したゝかやられて居るらしい。さてはしまつたと思つたがもう駄目、その時に思つた。Mがすぐ出て来ると思つてありのまゝ、將棋をして居る。云つたのが、こんな事になつてしまつた。こんなにか云つて置くのであつたのに、思つた。かく自分を責める。共に、心にひらめくのはMの仕打ちであつた。十年の知巳に約束をして置きながら半氣で將棋を打つ、そして約束の相手から電話がかゝつて來てゐるのに、二度迄もよびに行つて居るのに電話口に出て來ないその不徳、一体どちらが悪いのであるか、電話を取りつた事からこんなになつた事をはじる。共に、Mの行が苦々しいことと思つた。

その直後Mにありのまゝに先方に云つた非をMにわびる。Mはしきりに自分の非をあげけるやうに批判的に云つた。「今日の様な失敗をした事はない、將棋がもう終りかけて居たので結束をつけてお思つて、すむやいなや來たのであつたが時間が大分たつて居たらしい」云ふ。MはHより大そうしかられたらしい。「親の死に目にもあへぬ云ふが、こんな事から友情をそぐのである」云ひしきりに自己の非をわびる様に悔ひて居た。

後日他の同僚よりきいたのだが、Mはその時しきりに人の仕打ちをうらんで居た。か。(五・三・一)

新誌友

(五年四月十三日まで)

「川柳雑誌」前金半年分壹圓八拾錢以上拂込みの讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載します。何卒此際新讀者を御勧誘下される様御願ひ申します。御紹介下される方には「川柳雑誌」の近刊を見本として差上げますからお申込下さい。(縁雨)

小島素心、河合保三(住田亂耽)、岩原、筒井(山下佳水)、河村繁坊(荒井英賀夫)、藤田道太郎(長崎柳秀)、幸松四五磨(松盛琴人)、和田一郎、手塚豊次郎、横山勝三郎、高岡道夫、高永弘吉、三好計加、永井緑太郎、定廣金左衛門、小鐵千鳥、伊豫田登喜治、藤井義一、尾崎海洋人、廣島三郎、杉原三夫、高木實、上金松太郎、永島學、木山貞雄(本社事務所)括弧内は紹介者



各地柳壇

本社四月例會

於 端之坊

四月五日 花や踊に春の夜はなやましく更けてゆく。本社例會も少人數ではあつたが、路郎主幹の漫談に、山雨樓氏の句評に、或ひは久し振りの萬よし氏の顔も見えて一刻千金の夜を、こゝろゆく迄味つて十時半散會、(柳影記)

(參會者)路郎、柳影、苔香籠、綠雨、公二、海洋人、楚外、露斗、双車、稔、武藏坊、かほる、琴人、新水、豆秋、野人、さだを、繁坊、葉平、亂耽、愚陀、ひろし、萬よし、成馬、金太樓、無鬼、雨町、規堂、真平、里十九、博水、彩秋、内匠守、山雨樓、

兼題 賣 聲

懸引も出来賣聲も馴れて來る 萬よし 選 黃 蛾
聲程に不男でなし鬮賣 柳 精
賣聲にフト母の乳房を握る 海 洋 人
賣聲の止まつたさこで金魚浮き 楚 外

賣聲にすつかり惚れたさかで見ひ
賣聲をよそに株式値が決まり
賣聲の呼びさめられて唄でくる
土産屋は門巾だけを喋つて居
賣聲をおだてるやうな雨さなり
法界屋咽喉の縫帶目立つなり
驛々でアクセントの遠ふ面白さ
金魚賣こゝから島の内の晝
賣聲においてゝをしてるなり
賣聲を真似て子供は叱られる
春の家賣聲にさへほゝえまれ
二階から煮豆屋を呼ぶ首が延び
昆布巻屋焚火の方へ荷を下し
花や花桃も櫻も濡れてある
賣聲へもう出帆が追つて來
賣聲の本家ごうしが向ひ合ひ
賣聲へ子供は軽い寢息なり
賣聲を丁稚は真似て買ひに來る
規賣あさ一升の聲がする
同 露斗 山雨樓 柳影 葉平 露斗 葉平 露斗
公二 山雨樓 柳影 葉平 露斗 葉平 露斗
内匠守 稔 苔香籠 公二 山雨樓 柳影 葉平 露斗

賣聲の安い()に近所が出 同
(佳)助もぬ子供(金魚買つてやり 武藏坊
(佳)艶歌師の仲間(別な聲で賣り 公二
(佳)賣聲のさほりに歩む金魚賣 露斗
(佳)國訛りそれがもとの椿油 ひろし
(佳)賣聲を聞きつける役ひきり 路郎
(軸)ピルダンカ拔豆腐屋の聲なり 萬よし

席題 家主 山雨樓 選

此の上は家主の権利立退かせ
家主の目に壁の樂書
夏涼し冬暖かさ家主言ひ
立退のひざり家主へ意地を持ち
家主は船場の後家さだけを知り
總代だけに逢ふさ云ふ家主
鮮人をこそわり兼ねる家主
値下げすりや食へ啜うに家主言ひ
春のまん中に家主の屏が浮き
家主の娘のさつぐ日の雨
夢畑の青さを分けて來る家主
春の夜を家主に座り込まれ
拭いて居る格子を家主見て通り
(秀)釘を打つ音に家主見てなり
(秀)家主の金時計が恐ろしくなり
(軸)たまに來た家主へ花を咲かぬ
席題 人 形 亂 耽

人形師想ふ口びるなかりけり 金太樓
人形の頬の赤味を撫せて見る 海洋人
装ひをこらし人形運ばれる かほる
鼻のかけたが人形でよかつた 愚陀
人形だけ瞳明るく喪の一さ間 琴人

兼題 聲 ひろし 選

何の苦も知らず勢よく生れ
初聲を聞くまで高座放り出され
軍隊さ別な聲にて子を叱り
口論のやゝこしなつて聲尖り
掛け聲で仲仕の鍵から荷が放れ
五百番特にやさしい聲を持ち
隣まで来た賣聲が通り過ぎ
醉漢フト大聲出して笑ふなり
モダンガール男のやうな聲を出し
凜とした聲が氣質をあらはせる
戀文を書いている袴に母の聲
いゝ聲の戀の懺悔も面白し
聲變り子役そろゝ苦が立ち
舞臺裏島田を脱ぐと地聲なり
諦めた話へ聲を和らげる
反抗の聲ストロアの消へかゝり
其當座どこかに聲がする様ない
いゝ聲に末座 孟攻めに達しい
(地)聲がわり春の目覺めに眠らず
(人)燈臺に親子の聲の尖る夜
(軸)聲も方にひきつけられる人生
席題 湯上り 五健 選

湯上りに何か忘れて心持ち
湯上りにたゞ陶然と座つて
湯上りの繪になる女あちら向
湯上りを風にかせる二人なり
湯上りの素足に散つた春の泥
湯上りに生地の黒さを女見せ
湯上りの氣分を壊す嫌な客
湯上りにふさ見つけ出すクモの網

芳之助
素衣
風葉
松葉
時雨樓
支々子
紫石
計加
川の子
松石
雨眠
五健
冷々子
夢郷
青帆
素人
かき松
革郎
乱耽
ひろし
極選
計加
亂耽
青帆
拓水
柳女子
支々子
柳女子

(寫眞は 前列向つて右より來松の亂耽、ひろし、革郎、諸氏と後列素人、五健、冷々子の諸君伊豫新報社の門前にて同社寫眞部の撮影)



湯上りの襟の白さがなまめきて
湯上りのふさ行くまじき方へゆき
湯上りの今日日曜といふ氣もち
湯上りへすこゝう寒い窓を開け

革郎
時雨樓
極光
雨眠

湯上りを淋しくさせる妻の留守
(人)湯上りを彼岸櫻のうれしくて
(地)湯上りの眼元に見せて爪さし
(天)湯上りの機嫌へ妻のすげとし
(軸)湯上りへそゝの燈がさもり

川の子
青帆
柳影
柳女
五健

席題 雛 冷々子 選

舞妓から小雛を旦那買はされる
男の子だけで淋しい雛祭
奥さんの見て来た雛へ下女をやり
新雛を圍んで歌も舞も出来
陳列の雛を見つめて母を説き
初節句買つてやらない雛ばかり
雛祭り母臺所で疲れてゐ
幾星霜 晴着の儘の雛なり
飾難しげし樟腦たゞよはせ
内裏様鼻をかゞして春になり
駄々子の雛上段へ坐つて
お妾の子の雛に寝かされる
メリラゲが我が日の本の雛壇に
甘黨さ 婦人黨との雛祭
(人)雛に何か話してる女の兒
(地)初雛に氣骨の折れる里の母
(天)それぞれに輝きを持つ雛の顔
(軸)嫁さ戻り雛に向ひて若返り

柳女
計加
夢郷
青帆
素人
かき松
革郎
乱耽
ひろし
柳女
計加
夢郷
青帆
素人
かき松
革郎
乱耽
ひろし

川柳 守口支部句會 (大阪) 雑誌社

三月廿日 於 双葉子居 朝田新水報
壹週年記念の句會で各自の漫談川柳福引等
で非常賑ふた。

兼題 試 驗 鮎 美 選
試験管さ博士ひさりへ黄昏れて 京 郎

試験が済んで、親しくなりぬ
自信ある試験へ、軽う笑つて居
親の意に叛いて試験受けるなり
試験苦の膝をくづさず眼をつむり
（人）弟も試験牛乳ぬくめられ
（地）捨鉢な氣分試験にありはあり
（天）一年生試験へ歌を唄つてゆき

觀月 里十九 雙葉子 新水 かほる 公二 琴人

手衛場のシスは横目に光りすぎ
物凄しい笑ひに、及物さぎ上り
かみそりを持つて女房疳を立て
仲裁へ時のぼづみか血が浸み
人間を刀物が見れば面白し
尼の部屋及物を使ふ用が白來
双物を持って器用に手が動き
牛切つた庖丁青く光つてる

規堂 杏三 雙葉子 公二 觀月

（佳）魂を及物の前に夜が更ける
（人）磨き出す頃から月の冴え渡り
（地）切れさうな及物の欲も娘にて
（天）日本刀下駄飛び飛脱も逃げ
（軸）よく切れ持つと磨屋持て來る
（軸）其後は鉄持つとも子を叱り

荻美 一 荻美 一 荻美 一 荻美 一

垣から覗けば彼女留守らしい
コスモスの垣に靜かな日曜日
垣越して柿の實一つ眞赤なり
垣根からお血に入れた貰ひもの
郊外へ住んで垣根一種を蒔き
よび出しの電話を傳ふ垣根越し
晝下り垣にとまつた赤蜻蛉

里十九 金太樓 蒼太 觀月 雙葉子 鮎美

暖い陽射しに垣の影が延び
（人）じやが半を掘つて繕ふ竹の垣
（地）出戻つて垣に淋しき陽が當り
（天）年寄の垣の手入れに餘念なく
（軸）向ふから覗かれますうな菖蒲垣

同 燦郎 鮎美 新水 かほる

義足 義 足 杏三 里十九 鳴玉

突堤へ松葉杖だけひとつとかれ
義足 沁々冬が恐ろしく
乃木さんと話したこともある義足
（佳）競馬から儲けて義足歸るなり
（佳）生き物の口に義足が轉げ出し
（佳）職人の義足に馴れて衣業する

觀月 雙葉子 琴人 鮎美

士族と書いてひつそりとした住居
女中しても士族ださ云ふ父を持ち
倫落の水に浮いてる士族なり
士族から嫁を貰ふてあるさ云ふ
夕暮を士族は嫁に立つてみる
意見する二言目には士族なり
嚴格さ丈けは士族の裏に住み
士族である仕方おまへん鶴を飼ひ
聞合せて士族の事に聞いて去に

金太樓 新水 蒼太 雙葉子 かほる 荻美 一 琴人 同 公二

川柳雑誌社鎌川支部

川柳たかせ會句會（出雲）

四月二日夜 於雷相居 伊藤緑之助報

親類を相手の勝負乗氣なし
親類のはして選宮に呼びこまれ
覺悟した顔へ親類念を押し

兼題 親 雷相 選 松坊 麗 巫

喜びの今日親類のはしも來て
決心をして親類へ子を預け
親類もなく天孟が届けられ
（秀）まごこさも親類の子が客なり
（秀）豚狂な聲親類の門の中
（秀）親類は口を揃えて自重させ

紫光 縁之助 幸永 同 夢二 縁之助

點眼の足にて探るやう歩き
眼薬に寄る年波は争へず
眼薬に子供のがれたい努力
（人）顔の皺たざる眼薬悲しまれ
（地）眼をこすり眼薬順を待ち
（天）眼薬さ別な利益の禮參り

同 雷相 幸永 同 雷相 幸永

その辭に眞劍だとは言ひはする
露骨な交抄に眞劍があやぶまれ
眞劍な顔へ侮蔑の顔も見え
眞劍な戀さは死んでゆくことか
秘めて大戀打ち明けし妓の眼
のみ手かたふと眞劍な顔になり
眞劍になれば轉がる三輪車
（人）眞劍に言ふのに茶化して
（地）眞劍は女の力ともみえず
（天）眞劍の下かひ潜る術もあり

鐵槊 巨柿 麗 巫 紫光 夢二 雷相 夢二 濱郎

水兵は解放された氣で歩き
水兵を見送る人さ空の雲
水兵の聲も綺麗に呼び返し
水兵に賣り切れそうな櫻餅
（秀）水兵に港の夜が短かすぎ
（秀）水兵の手旗器用に動いてゐ

麗 巫 鐵槊 雷相 縁之助 紫光

席題 水 兵 幸永 麗 巫

席題 水 幸永 麗 巫

席題 水 幸永 麗 巫

席題 水 幸永 麗 巫

席題 水 幸永 麗 巫

席題 水 幸永 麗 巫

席題 水 幸永 麗 巫

(秀)水兵の帽子に光る忠を愛 幸 永

鋸屑にたゞふ松の木のかほり 巨 選

時は春川を流るゝ屑の色 鐵 漿

屑屑を冠り煙草のうらゝかき 幸 永

屑箱の掃除に鼠怯えたり 紫 光

紙屑の中に鉛筆見つけられ 麗 巫

もう夏になつたるセルのたもこ屑 雷 相

屑籠に大事なものの時を待ち 緑之助

川柳雑誌社 四月親櫻句會 (大阪)

登ヶ池支部 藤本可章報

四月六日

院内數十株の櫻樹を春装全くなり數百基の

雪洞に灯の點つた夜櫻の眺めも又一段、刀根

山もこゝ暫くは爛漫の春に恵まれて居る。咲

き亂れる櫻花の下にこの日本社より 雨町氏

の御出席を仰ぎ觀櫻句會を開催した。席上同

氏より有益な御講話もあり頗る盛會であつ

た。

兼題 滿 開 雨 町 選

滿開に五十男も浮かれ出し 芳 水

失職の身に滿開のつもらなく 松 露

滿開に田舎の客はあほらしく 湖 三夫

一人子を連れ滿開の中に立ち 湖 舟

旅先で早や滿開の櫻を見 長 城

散りぎはの今を盛りと咲いて居る 九 品

滿開の茶店にけんか二ツ三ツ 長 舟

滿開は安靜なんかして居れず 積 郎

滿開へ三味は弛んだ音を立て 一味

滿開の隅で風船玉を賣り 選 人

兼題 急 用 雨 町 選

急用へ具合の悪い客が あり

急用の下駄はさんちんかんにはき 石 松子

急用と云つて電話を借りに来る 一 味

急用は電報打つと約束し 積 水

急患へ夜の静寂を破るべし 正 坊

急きたてる足へ丁稚の小さき急用 芳 水

看護婦の足音あらゝい急用 正 坊

急用を知らしに來たはチトゴもり 武 郎

急用を知らしに來たはチトゴもり 湖 舟

急用を知らしに來たはチトゴもり 同 舟

急用を知らしに來たはチトゴもり 同 舟

急用を知らしに來たはチトゴもり 同 舟

急用を知らしに來たはチトゴもり 同 舟

急用を知らしに來たはチトゴもり 同 舟

急用を知らしに來たはチトゴもり 同 舟

管乏の理想ばかりが大きいすぎ 雨 町

あへなくも理想を捨てたるベツト 一 味

一人娘の理想に母は困るなり 松 露

生活と別ものゝやうな理想 九 品

理想と一才はなれた家を建て 三三夫

川柳 糸屋町支部句會 (大阪)

維誌社 近藤テルホ報

三月廿九日

花も咲かざり云ふ三月二十九日夜に、今年

始めての糸屋町句會を蒼梧樓氏の榮輝、翠

峯、源坊兩氏の結婚祝を兼ねて某所にてチビ

リ〜と始めました。集る者十一人糸屋町支

部始まつての喜びの三重奏に、酒は宜し頃宜

し各自終電まで、大いに句駄を巻きました。

睡 蒼梧樓 選

睡を呑むことの多かる 一生や 赤 城

見えすいた嘘と睡のすてごころ 源 坊

うつかりと別荘の庭へ吐いた睡 新 水

睡を飲む音にざんげの我を知る 舟 々

睡のんでくやみの順を待つてゐる 松 郎

睡をはき〜下宿をかわり 同 選

寢轉で見ても淋しい堤なり 舟 三

黄昏れの堤を唄ふ子が戻り 卯 々

傳説の土手八丁も春に崩え 金太樓

使はれてゐる身を土手へ來て忘れ 松 郎

家鴨塙を下りていそがしく 武藏坊

土堤へ來てから月を見直し 蒼梧樓

(人)少しづつ女堤を滑るなり 舟 々

(地)弟を思ふ心に土手を降り 松 郎

(天)堤枕に春を吸ふてる 赤 城

(軸)眞晝の堤を牛が逃げて来る 源坊

春さ女

松 郎 選

氣の早い蠅が邪魔する針仕事 源坊

訪づれば素足を逃げた許嫁

テルホ 若梧樓

美しく生れて春はなやましく

女房も春懐かしう鈴をつき

金太樓

理智がつかつて春になじまぬ女なる

赤城

男から春のはひの手紙くる

同 赤城

懐みある女さし見えぬ花見衣

同 赤城

振り出しの効験も見えず花曇り

同 赤城

(軸)春もよし襖に映る嫁の髪

同 赤城

東風を掃く夫の留守を子の留守を

同 赤城

川柳 雑詠社

北浜 支部

四月例会 (大阪)

川柳 雑詠社

四月二日 於拙居

席題 花 見 互 谷村稔

夜櫻へ母氣まぐれな宵を出る

玲 峯

慰めの言葉に花を振りかへり

同 玲 峯

落つかぬ花見子供を寝かせて来

同 玲 峯

お供には花見る暇もなかりけり

同 玲 峯

失職の眼にさくらいだ

同 玲 峯

大將に成るのたま言ふ幼稚園

一 舟

交際もせず將來へ貯めてある

清 三

難關は突破する氣で世間へ出

同 清 三

(佳)將來があつたことばう言はず

同 清 三

(軸)將來を契つたことばう言はず

同 清 三

兼題 禁 酒 琴 人 選

絶望の瞳に酒を悔いてゐる 佳 風

禁酒宣傳にたてつく親爺なり 玲 峯

禁酒して夜具の堅さに寝付かれず 一 舟

禁酒して何かして見る氣にもなり 清 三

明日からはきつて禁酒を酔ふる 同 清 三

禁酒をばして人生が暗くなる 同 清 三

酒やめてしまひみ話す叔父になり 同 清 三

六十の母親が有り酒を断ち 同 清 三

禁酒した譯は語らず笑つてゐる 同 清 三

禁酒して膳の廣さが物足らず 同 清 三

(佳)禁酒して寂しく月夜戻つて来 同 清 三

(軸)三日目に禁酒は酔つて戻つて来 同 清 三

兼題 看 護 婦 草 郎 選

看護婦にちとからちつて見たく成り 玲 峯

阿呆らしい無理に看護婦逆らわす 一 舟

看護婦が附添うて来る終列車 正 三

看護婦の方もほろりさして話し 同 正 三

(人)寝入らざら看護婦は髪を解き 同 正 三

(地)スリツパの音へ看護婦若見え 同 正 三

(天)看護婦と今日一日の答をとり 同 正 三

(軸)看護婦は死んでお詫びを致し 同 正 三

川柳 雑詠社

平塚支部 銀灯居偶會 (神奈川)

四月六日 酒井駒人報

初夏のような六日の夜、笑童、城月、美知坊の

三君と共に平塚海岸へ散歩に行つた歸りに

近頃やつと全快した銀灯氏を訪問して句を

作る

兼題 春の郊外 駒 人 選

スマートな家郊外に立ちならび 銀 灯

處女達満足して春の風に生き 笑 童

春風に二三里あてもなく歩き 城 月

(佳)春さなる女の素足土をあび 笑 童

丸髷になつて明るく春を居る 美 知 坊

丸髷の仲居置酌のまんま立ち 駒 人

まれに見る髷の姿に親しまれ 城 月

兼題 杖、繪馬 互 選

松葉杖矢張り丸髷通つて見 銀 灯

繪馬堂に祈る女に灯がさもり 城 月

繪馬堂の横で鳩の豆が賣れ 駒 人

愚かしく生きて祈願の繪馬を書き 笑 童

狡猾な渡世になれて松葉杖 同 笑 童

川柳 雑詠社

梅田支部小集 (大阪)

三月十八日於 里十九居 永田里十九報

兼題 善 惡 琴 人 選

善惡はさにかく義理はどうします 卜 居

善惡の岐路にたえずむ二十一 觀 月

罪は消へ分け神様へむさぶつき 鮎 美

善惡を色分けにするインキ壺 同 鮎 美

(佳)善惡の話しになれば下をむき 石 竹

(佳)冷へた茶のどが鳴る長き心 同 石 竹

(佳)善惡の辻説法の雨に濡れ 鮎 美

(佳)囚人の飢へし心に月が射し 同 鮎 美

(佳)善惡の冷めたく小石蹴る見 同 鮎 美

(軸)飢じさへ善惡の理智暗うなり 琴 人

兼題 日 傘 かほる 選

日傘もたされ辻で待たされ 里 十 九

ホートから日傘へ寫眞機を向ける 觀 月

襟足を透して見える絹日傘 夕 鐘

氣取つてるやうな日傘が散る 石 竹

五七

日傘たさんでみらい暑うおます

工夫の目それて繪日傘辻を折れ

參詣の日傘の秋風があら

いい婿の日傘うれしく忘れられ

(人)江の島の橋いつばいに日傘を

(芭)石段さぼる日傘は下女が持ら

(天)繪日傘の秋を赤く見せて去に

(軸)清水の下に日傘がならぶなり

湯加減を聞いて花嫁ちさ赤し

花嫁のかんざし又も落ちかかり

花嫁の恥かしさうにお茶をくみ

(佳)フェルトの減り方花嫁のうち

(佳)花嫁の姿は雨戸閉めてゐる

(佳)花嫁が小春の様に獨りゐる

(軸)花嫁に照る日ばかりが續くなり

(軸)羞しいこゝろを花嫁言はされる

一匹も釣らず横綱戻つて來

關取の禰自分で締められす

川柳雜誌社 第十一回川柳會(松山)

四月五日夜 岩本素人報 席題 夕 暮 互 選

ト居

琴人

同美

夕鐘

同美

琴人

かほる

ト居

かほる

琴人

石竹

同美

同美

同美

石竹

石竹

石竹

石竹

そこらまでゆく夕暮の子守唄

夕暮を淋しい月見草の丘

夕暮になるさ里子を想ひ出し

夕もやの中へ消へゆくモスの帯

夕焼へ劍鞘の子が暮れ残り

夕暮に父の足音聞きつける

夕間暮つたり戻る共稼ぎ

夕暮の宿を覗いてゆく廻路

夕暮の色を雲雀が縫ふて下り

夕暮れに京で淋しい鐘を聞き

夕暮れに素通りにする花の灯

夕暮れに浮き立つ人へ明るい中

兼題 釘

い、柱釘跡一つ惜しまれる

釘付けの様な姿勢の初年兵

標札をはづしたらしい釘の跡

手の届く限りのさこの釘へかけ

一つ宛大工から出して打ち

靈芝

天紅望

武子

秋無草

夢無草

春無草

かき松

青帆

巨城

松葉

五月

松石

春峰

榎影

夢無草

紫石

松葉

松葉

滄々

靈芝

巨城

五月

青帆

素人

松葉

青帆

五健

巨城

武子

冷々々

松石

夢無草

かき松

松葉

松葉

松葉

蚤がせめ思はぬ月を椽で見

蚤を捕るまでさ坊やをいらだせ

蚤飛んだ飛んだに一座立ち上り

敵討する様にさる朝の蚤

お隣で貰つた蚤にして殺し

(人)撥翰のある手が蚤をさり逃し

(地)偶然に押へた蚤を手柄がり

(天)貪しきは蚤にも馴らす子の寝息

(軸)蚤の飛ぶにも尖る神經

兼題 豫言

恐ろしい豫言に遺言をかく氣なり

問題にせなんだ豫言運にする

豫言者の胸に大きな嵐の夜

變説の眞理のと豫言批評され

豫言して親方金を借してくれ

豫言者に扮する役者四十過ぎ

豫言者に言ひ當てられて床に就き

豫言して腹の子を待つむつまじさ

滄々

靈芝

巨城

五月

青帆

素人

松葉

青帆

五健

巨城

武子

冷々々

松石

夢無草

かき松

松葉

松葉

松葉

川柳 御旅支部四月例会(大阪)

雜誌社 四月六日 於あやめ池溫泉 櫻井四角報

兼題 金遣ひ 路 耶 選

金遣ひ派手な養子は去ぬ氣なり

妻が居す又も今夜の金遣ひ

路 柳 腰

路 烏

路 烏

路 烏

路 烏

路 烏

路 烏

路 烏

路 烏

路 烏

路 烏

路 烏

路 烏

カフエーであれよこれよと奢らま
さかしエの現れて居る金遣ひ
ふんだんに有つて細かく遣つて居
金遣ふてからが人間になりました
春の金さも軽ろくと飛んでゆき
使ふときの豪語に無心相立たず
叔父さんは切れてじやからさ金遣
(人)遣ふこさばかり嬉しい子供
(地)男の子金が要つたでふれなき
(天)やけくその金遣ひしが哀なり

兼題 出無精

路 郎 選

路 郎 選

出無精が留守勝となり事あらむ
出無精になつたを同僚知つて居る
出無精もわが子にだけは根まげし
出無精も金の催促には出掛け
たまたまに出れば頭痛がすき云ふ
花も見ずうちで暗衣を眺めてる
行樂をするには姉の傷みすぎ
大方の出無精も出る花ざかり
出無精になるのも因はお金から
出無精の主人を持つて氣がつまり
寄合ひに妻は亭主を無精にし
(人)出無精でと云つて居る身分
(地)出無精が空ばかり見て又座り
(天)出無精の母ではあるが聞合せ

兼題 咳

路 郎 選

路 郎 選

咳一ツとして見るホルルの眞まん中
咳にさへ新妻らしい柔らかさ
咳一ツしてもお醫者にかげし子が
咳だけは止んで欲しいと神頼み

路 郎 選

席題 櫻

路 郎 選

石投げて見たい櫻の花盛り
櫻散る花びらが散る日が沈む
(軸)有情の櫻女は媚びてゐる
櫻は白け主婦は老ひたり
こちらの呑む算段に咲く櫻
凡人にいつちうれしい櫻咲く

席題 此の頃

路 郎 選

このころは冥福なんど祈つて
此頃の無沙汰奴に云はれてる
(軸)このころはあつち迄大きく出
(軸)このころは夢の話もせぬ女房

川柳 守口支部例會 (大阪)
雑誌社

四月九日 於原あきら居 朝田新水報
席題 春の宵 五

水の流れも静かな春の宵
さしがし辻を折れて春の宵
夜櫻の酒に酔つて四十なり
春雨にのろけ聞ける今宵なり
春宵をいらだたくも一人居る
爪弾に昔を偲ぶ春の宵
春の宵不景氣何處を吹く
春の宵なやむ男さなつてある
なんかなし歩きたい様な春の宵
席題 玉突 五

難玉がはいつて顔の汗をふき 當り矢
青春を玉を突いてる憂鬱さ 若太
玉突いて戀の辻占吉と出る 同
愛人の勝てばよいがさゲーム取 新水
三十を突けて淋しく語る戀 同

川柳雑誌社 光穂居小集 (兵庫縣)
加古川支部
三月二十一日 水田光穂報

春

篤 男

フェルトのほこり 暮れる花の山
買ふてやると言つたまんまで春
春の宵戀の匂ひに暮れ迷ひ 光穂
戀の吐息に月の曇りし 同

珍客

光穂

珍客は田舎に居たい様に言ひ
珍客のわが子の様に頭なげ 光穂
取り亂す中へ珍客あわてさせ 篤 男
挨拶がすめば隔てぬ友であり 同

川柳雑誌社 四月例會 (大阪)
天王寺支部

四月十一日 於内藤製作所 須崎豆秋報
席題 春 雨 琴 人 選

サーカスの春雨綱の上を行き 柳 精
愛撫する様に春雨が泣ける 石 入
若燕よ若燕春雨に降け 石 竹
春雨に壁の重みを行くよ 海洋人
(佳)春雨に子供の相手だけで暮れ 鶴 峯
(佳)新聞が少しぬれてる春の雨 武藏坊
(佳)春雨に青い雨傘借りて来る 豆 秋
(佳)瓦斯燈へだけ春雨の糸を引き 朝 雨

(佳)春に芽の出るのを眺めてゐる
 (佳)官舎の庭に春雨降りつゞく
 (軸)人形の瞳へ春のもの思ひ
 (同)春雨へ紅屋小町の赤い襟

緑雨 緑雨
 同 同
 同 同

兼題 月 末
 月未なれば何かさす返事
 女房の無日月末酌いである
 月未へ都合のついた二百圓

柳翠 柳翠
 朝雨 朝雨
 琴雨 琴雨
 朝雨 朝雨
 秋人 秋人

(佳)バスに揺らぐ月未の雨
 (佳)こころならず月未の泊り客
 (佳)月未へ考へぬいて歩いてゐる
 (軸)速達も出し月未は忙しすぎ

緑雨 緑雨
 琴雨 琴雨
 朝雨 朝雨
 秋人 秋人

お、泣くなよ湯氣捕へたま
 湯氣をのこして友だちも出る
 佛だんに湯氣を供へて老夫婦
 静かな晝を湯氣にもほす春の部屋

豆秋 豆秋
 柳翠 柳翠
 鶴人 鶴人
 斗人 斗人
 琴人 琴人
 海洋人 海洋人
 洋人 洋人

考へる火鉢へ湯氣の廣がりて
 (佳)赤い顔の湯氣の丸るのみ
 (佳)鐵瓶の湯氣が障子に映るのみ
 (佳)湯氣の向く方に客すはつて居る

豆秋 豆秋
 柳翠 柳翠
 鶴人 鶴人
 斗人 斗人
 琴人 琴人
 海洋人 海洋人
 洋人 洋人

(軸)茶の湯氣に母と話のさも勝ち
 席題 交互點
 交互點まで送つて行つて酔ふてる
 交互點自轉車の荷がこけかけり

武藏坊 武藏坊
 石竹 石竹
 線雨 線雨
 鶴峰 鶴峰

交互點まで男に付たまさわれて
 女の方が先に來て待つ交互點
 川柳
 雜誌社
 三月十五日
 高橋かほる
 石竹 石竹
 線雨 線雨
 鶴峰 鶴峰

壁へすねてる戀の手ならひ
 舞子の帯に壁が冷めたい
 去ぬ時の姿が壁にうつるなり
 壁へ手をやつて二階を息子下り

同 同
 同 同
 同 同
 同 同

川柳雜誌社
 支部 川端柳社三月例会(鳥取)
 鳥取 支部
 三月十五日 於蓬萊館
 中島鐵洲報

町 二
 選 選

息 氷柱
 コスモスの乙女の息になぶらつて
 消へ残る雪に登山の息をうつき
 乳臭い息頻摺の鼻に來る

湖山 湖山
 湖山 湖山
 湖山 湖山
 湖山 湖山
 湖山 湖山
 湖山 湖山
 湖山 湖山

坑口で會つて女房のほつとする
 水車休めば氷柱になる寒さ
 因の身には氷柱も親く居る
 宿醉に氷柱まぶしく光り居る

同 同
 同 同
 同 同
 同 同
 同 同
 同 同
 同 同

晴やかに今日は氷柱の落る音
 凍て居る中にかすかな瀧の音
 手洗ひの氷柱女を寒がらせ

耕民 耕民
 同 同
 同 同
 同 同
 同 同
 同 同
 同 同

解散に巡查の帽は眉深なり
 解散に激し聽衆椅子を蹴り西東
 萬歳の三唱すんでかほる

鐵選 鐵選
 同 同
 同 同
 同 同
 同 同
 同 同
 同 同

職工の何に感じた髪を置き
 休職の日から隣に親しめり居る
 就職に妻辨當を押さえて居る
 就職に妻を説き葉櫻に又誘ひ

同 同
 同 同
 同 同
 同 同
 同 同
 同 同
 同 同

川柳 雜誌社
 平野支部句會 (大阪)
 四月十二日夜 於 黃蛾居 熊本黃蛾報
 兼題 同 情 公 二 選

同 同
 同 同
 同 同
 同 同
 同 同
 同 同
 同 同

同情のぬに遺族の恙なし
 同情の袖に辻うら賣の聲
 同情はするが家主横を向き
 同情をされる男となりにけり

助馬 助馬
 春波 春波
 柳影 柳影
 公二 公二

(軸)捨てられた女へ女泣いてやり
 席題 春 衣
 春衣もたす爭議の中に居る
 すすがしきも春衣の素足

成馬 成馬
 豆秋 豆秋
 柳影 柳影
 公二 公二

春衣着て淡い淡い戀ごらる
 娘もう春衣なれたる年になり
 春の魅惑よひるがへる裾
 新装の春衣に風のうそ寒く

柳影 柳影
 助馬 助馬
 公二 公二
 豆秋 豆秋
 柳影 柳影

書き直し書き直しする繪封筒
 封筒を重う受けてる勘定日
 胸騒する封筒の表書き
 國からの便り急いで封を切り

春波 春波
 公二 公二
 馬六 馬六
 黄蛾 黄蛾
 助馬 助馬

(軸)母親の知らぬ封筒をなめる
 席題 月夜、隣り
 遠吠の淋しきよい月夜釣り話
 寝るのにも惜しい月夜の釣り話

助馬 助馬
 春波 春波
 柳影 柳影
 公二 公二
 豆秋 豆秋
 柳影 柳影

面白い話が隣り高笑ひ
 お隣に硝子さ隣りから深め
 子のない淋しき隣りから深め
 引越した初め隣へ氣兼ねも

助馬 助馬
 春波 春波
 柳影 柳影
 公二 公二
 豆秋 豆秋
 柳影 柳影



編輯後記其他

路 郎 生

▲編輯から編輯、それは實に短い一ヶ月である。當日には行く常よりも早く起き事務所へ行く迄に、編輯上のいろいろな準備をする。本號の編輯日には午前十時に家を出た。事務所まで電車とバスの乗次ぎで、どんなに早くても一時間かかる。バスが杭全町の郵便局の前に止まつた時郵便局から出て來た綠雨君に聲をかけた。松山へ宣傳誌を送り出したところだと頗ぶる景氣の出したことを云ふ。今日はお氣が一番乗りだつた。一時ごろからぼつ／＼編輯局員が何處からともなく集つて來る。三時ごろまでに重役まで出揃つた。編輯局で重役と云ふのはなるべく働かないで、煙草を喫つたり洒落飛ばしたり、用事を他に轉嫁したりしてゐながら、さも働いてゐる様に大きな顔をしてゐ

ると、いつの間にか付く代名詞なのである。ソレを又使う人が居る。「オイ重役、一寸煙草を買つて來て呉れ」「よし來た」「重役、その火鉢を取つて呉れ」「よい來た」と云ふ調子で、重役は直ぐに尻を上げる。實に氣輕な重役だ。この重役あるがために編輯室の空氣は實になごやかだ。

▼ビルディングの原稿、早速短いのが來た。それを間に挟んで見た。一寸感じが變つて面白いだらうと思ふ。

▼「川柳と俳句の類似點と相違點を述べよ」といふ入試試験問題が天王寺師範で課された。その問題を提出された教諭に四月九日の正午から山兩樓君と私とが會つた。その間の消息を山兩樓君が「川柳と教育」と題して本號に書いてくれたから一讀

を煩はしたい。

▼私は本號から愈々「柳壇の人々」に手をつけることにした。私が「柳壇の人々」を書くに云ひ出してから既に數年の歲月が流れてゐる。その間幾度か書きかけては見たが私の考へてゐるやうなものを書くためには其の準備として一人を書くにさへ非常に多くの時日を費さなければならぬことになる。それでは「川柳雜誌」のために是非さもしなければならないことが出来なくなるので止むなく見合はせてゐた。ところが、蛭子省二氏が舊冬十一月に寫眞を撮つたから云つて、私にその一葉を惠まれたので又々「柳壇の人々」を書きたいといふ考へが擡頭した。それで新年號から、はじめて見やうと思つてゐるうちに例の難しく考へ過ぎるのさ、多忙とがこんがらかつて又々逸してしまつたが今度は全然從來の方針を變へて、至極簡単に感想風に書いて見やうと思つた。さうすれば案外樂に書けないこともなからうと思つたからである。巧く書けたらお慰みである。お馴染甲斐

に御愛讀と御聲援たまはりました。

▼本號の表紙は同人の素人君が描いた。頗ぶる輕妙な筆で晩春初夏の感じを出してゐる。大いに味つて欲しい。

▼月評會は十日の夜、例によつて里十九居で開いた。評者として紋太、ひろし、琴人、山兩樓亂耽の諸君と僕とが出席した。筆記は例によつて杏三、愚陀の兩君を煩はした。里十九君が時々店の忙しさから抜けて傍聴に上つて來るだけである。外は、しめやかか春雨に濡れてゐる。批評はきはきと進んだ。會を閉ちてから暫く雑談に耽つた。

▼五日の本社句會に政務多忙裡を抜けて萬よし君が出席した。それからあらぬか散會後新成橋の「萬よし」へ立寄つたところが川柳家で満員客止のありさま、萬よし老又お客然として存す。ためし女史の御機嫌斜めならずである。若手連呑みながら店頭に二次句會をひらく。公二大いに川柳を論じて若手のため虹の如き氣焰をあげ、店内の老年組をして啞然たらしめた。

▼お旅支部の句會が六日の午後

から大軌沿線あやめ池の温泉階上で開かれた。日本醫學大會への遠來の客をねぎらうための人々や會務に疲れた人々のために出席者が少なかつたが會が済んでから共に湯に浸りぶらぶらあやめ池を回遊して夕櫻の觀賞をほし、まゝにし、圓角、多郎翠夢寺の諸君と生駒で一盞を傾けて歸阪した。

▼七日に鳥取支部の中島鐵洲君の來訪をうけた。談は川柳展覽會を開いて川柳の鳥取を出現させたいから後援して呉れさのことであった。鳥取新報と川柳雜誌社の後援の下に會場は市の商工會議所で開くこと、社會宣傳を標榜して立つてゐる本社のことであるから二つ返事で應援を快諾して置いた。就ては同君から依頼状の行つた人々は勿論のこと、それを受取らない人々でも出来るだけ力を貸して貰ひたい。私からも特にお願ひする。

▼綾雨君が金澤で廿日の午後一時から開かれる北陸川柳大會へ出席のため十九日の夜行で立つた。

▼前號の編輯後記で、亂耽の卒

業少振りを一寸紹介したところ常人その記事を読んで「編輯後記の僕の事餘りにも眞實過ぎますよ」と云つて來た。僕も「あまりにも眞實すぎると思ふ。君だからいゝと思つたんだが勘辯したまへ」と早速返事を出して置いた。あゝした記事はこれから少しく割引して讀んで貰ふことにした。今日は次のやうな葉書を寄越したが彼は決して労働者ではないから前以てことわつて置く。

「先生しばらく御無沙汰（路郎曰く。一寸待つて呉れ、まだ別れてから四五日しか経たないぢやないか）昨日私はトラツクの助手となつて労働の實踐を試みました。（路郎曰く。電車賃などに麻雀俱樂部へ來る手段さとしてかぬ。それだけの奇才があれば何處かで雇ひ手があるよ）湊町の荷受場の混雑さ、貨物の持つ臭氣、汗の交錯、それ等から私は労働のいかに尊いものであるかに力強く打たれました。まことに仕事を持つてゐる人間は或る強さを把握してゐる事は確かです。（路郎曰く。それこそ難か

ら出た誠だ。一時的労働者でも尊いエキスバリエンスを感じ得られたことは亂耽君のためによるこぼしい）

▼平塚支部の駒人君、三月二十八日に復興の都から「今朝親子三人で復興の帝都を見物に來ました。明日は明治神宮に參拜してそれから主なるところを見て、時間の都合で、きやり、すずめ兩吟社を訪問したいと思ひます子供はさても元氣で電車をめづらしそうに見てゐます」云々の頼りがあつた。

▼汀柳、雨迷の兩君、奥州白河に遊んで三月二十五日白河ホテルからの頼りでは

「白河の繪葉書を希望いたしましたがないさの事です、東北川柳能因會の一同は皆面白い人々です、五花村さんは臺灣旅行の爲めに不在でしたが、奥州の名に引かれて静養の意味で、れました（路郎曰く。静養は可笑しいが遊んだ疲れの静養らしい、僕もそんな静養をしたい）まだ梅の花も咲き誇つて底冷えの氣持です、近くの那須山に擴がる高原に、みちのくの感じを一層

六二
深めます、昨夜一泊、今日三時に出發です、葉吉、喜四雄、九光氏らに面談いたしました」のこと。

▼十七日の午後、琴人君の案内で「きやり」の野口自樂人氏が來訪された。夜になるのも忘れて三人で川柳を語つた。僕は海のものとも山のものともわかぬ將來のことはあまり話さぬことにしてゐるが、この日はその點にまで談が飛んだ。愉快だつたからだ。夜に入つてから三人で南地の酒に浸つたが、遠來の客は持病のために四、五、六の三ヶ月は酒を慎まなければならぬのださのことに大いに敬意を表して琴人君と僕とが主として呑んだ。

▲第二回海峽親善川柳大會が五月十八日午後四時から函館市末廣町東部事務所の上で開催される。宿題は「壁」夜半杖選「生活苦」不浪人選、交際「花童子」選各題三句半、紙半截別紙、五月五日締切、函館市青柳町五〇龜井童子宛の事。

投稿規定

▼近作柳檉及課題吟の句稿は、葉書又は同型の厚紙に各題別紙に認め、住所氏名雅號を明記すること。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記のこと。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認めること。

▼書體はなるべく楷書一川柳雜誌原稿と封筒に未記すること。

▼縮切は嚴守されたい。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募 集

第七卷第七號課題

五月五日締切

(各題十句以内)

- ▼新緑 麻生 葎乃選
- ▼見送り 橋本 綠 雨選
- ▼方角 朝田 新水 共選
- 中見 光路 共選

第七卷第八號課題

六月五日締切

(各題十句以内)

- ▼秘密 岩本 素人選
- ▼深夜 福田 山雨樓選
- ▼空車 出口 雨町 共選
- 中澤 濁水 共選

每 號 募 集

▼近作柳檉(拾句迄) 麻生路郎選

▼各地柳壇(會報)

▼文章(評論研究感想吟行漫文)

▼社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

價 定

普通通號 一部 金參拾錢
 新春特輯號 一部 金五拾錢
 八月特輯號 一部 金四拾錢
 半箇年前金(特輯號共) 壹圓八拾錢
 壹箇年前金(特輯號共) 參圓六拾錢

料 告 廣

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼請代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(二年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりご御指承願ひます▼轉居又は改名等の節は奮新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和五年 四月廿五日印刷
 昭和五年 五月 一日發行

第七卷第五號
 (毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 大阪市内西成區千本通五丁目七番地 麻生 幸 二
 發行所 大阪市内西成區千本通五丁目七番地 川柳雜誌社

事務所 大阪市住吉區杭全町六〇三番地 電話天下茶屋二五七九
 振替大阪七五〇五〇番
 電話天王寺一六七番

川 柳 雜 誌 社

店書開賣 (大阪) 大賣捌 二盛社書店。(明文堂 其他市内各書店)
 (東京仲見世) 玉森堂(神戶) 米田、後藤、實文館(函館)
 石塚(京都)三宅(松山)弘文舎

川柳雜誌關係人々

賛助員

池澤樂雄 岡本直方 片岡純二 嘉納辰秀 田中辰二 長崎柳秀 藤枝史郎 藤本卯之助 赤井清一 末弘太一郎 伊藤員 西島柳明 大島濤明

社友

川上三太郎 川村花菱 吉岡鳥平 吉田清樓 窪田銀波 安川久流 前田雀郎 小出宿重 柴谷柴舟 篠原春二 蛭子省雨 森元東太 相元紋太 池田雪峰

道頓堀支部(大阪市)幹事庄 万よし
 天満支部(大阪市)幹事北山 悟郎
 濱寺支部(大阪府)幹事太田 朝陽
 神戸支部(神戸市)幹事西村 市公
 山口支部(山口縣)幹事柳川 洲馬
 國館支部(函館市)幹事龜井 花童子
 小松支部(石川縣)幹事本田 柳一路
 高知支部(高知市)幹事中澤 濁水
 梅田支部(大阪市)幹事水谷 鮎美

本村柳一路 西村文蝶 土井貴山 友淵貴山 若井たけし 谷村稔 辻左馬 永田里九 中川めかく子 中野柳陽 中澤濁水 中見光路 植田柳舟 桑原湖舟 松村京郎 松田多郎 松田清白 清水井梅 風光里 山本汀雨 増位公柳 近藤テルホ 熊本黄蛾 柳川洲馬 楊井二南 越田久水 安西杏三 阿形一杉 阿部閑生 櫻井圓角 木山青砂 水田光穂 三輪五輪 白井梅輪 清井風

同人

須崎石竹 森崎豆秋 酒井駒人 伊藤緑之助 朝田新水 岩本素人 水谷萬よし 岩崎柳路 庄萬よし 伊藤愚陀 編輯局(同人) 原史風 石川双葉子 長谷川一徹 橋本緑雨 太田朝陽 安井ひろし 小川三猿堂 松丘町人 龜井花童子 松盛琴人 高橋かほる 出口雨乃 竹内多聞 麻田亂乃 藤里好古主 住田亂乃 福田山雨樓 麻生路郎

螢ヶ池支部(大阪府)幹事植田 湖舟
 金澤支部(金澤市)幹事中川めかく子
 糸屋町支部(大阪府)幹事近藤 テルホ
 田邊支部(和歌山)幹事辻 左馬
 篠川支部(島根縣)幹事伊藤 綠之助
 豊橋支部(愛知縣)幹事白井 梅里
 平塚支部(神奈川)幹事酒井 駒人
 加古川支部(兵庫縣)幹事水田 光穂
 京都支部(京都市)幹事桑原 京郎
 鳥取支部(鳥取市)幹事中山 鐵洲
 北濱支部(大阪府)幹事谷村 稔
 別府支部(別府市)幹事小川 三猿堂
 堺支部(堺市)幹事友淵 貴山
 松山支部(松山市)幹事岩本 素人
 守口支部(大阪府)幹事朝田 新水
 御旅支部(大阪市)幹事櫻井 圓角
 高岡支部(富山縣)幹事越田 久水
 天王寺支部(大阪府)幹事須崎 豆秋
 平野支部(大阪市)幹事熊本 黄蛾

古本屋時代

今のやうにあさから新刊が出るに新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよく讀むころになれば、もう古本で至極新しい本が出てゐる。こうなればわざわざ新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に

公立社の棚

には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。

(路郎生)

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋

を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

清 酒

午後六時 白鶴が待ち妻が待ち



白鶴をチントンシヤンと提げて来る

灘 津 攝

釀 社 會 名 合 納 嘉

大正三年三月三日第三種郵便物認可(毎月一圓一圓五分)
昭和五年四月廿五日特許商標
昭和五年五月一日特許

川柳雜誌

(第七十六號)

定價金三十拾錢